

# 「望ましい人間関係を形成する能力」の積み上げを目指して ～保幼・小・中の発達段階を考慮した授業実践～

静岡市教育センター 長期研修員  
静岡市立安倍口小学校 赤田 陽子

## 【研究の概要】

子どもの「望ましい人間関係を形成する能力」を育成しやすくするための「授業プログラム」を作成し、提案することを目的とした研究である。学習指導要領等から「望ましい人間関係を形成する能力」育成のための「自己表現力」と「他者理解力」に関する発達段階別のあらわれを整理した＜基礎研究＞と、静岡市内の1中学校区（3保育園・1幼稚園・3小学校・1中学校）の教職員を対象としたアンケートの結果をまとめた＜調査研究＞、加えて、それらをもとに授業プログラムを作成・実践する＜開発研究＞を行い、3つの研究から考察を行った。

## 1 主題設定の理由

### （1）子どもたちの実態から

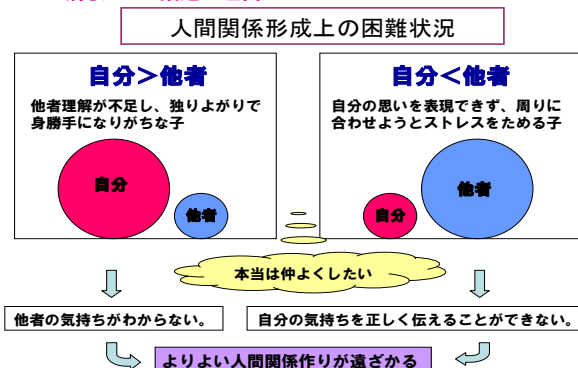
現代は、便利さ、簡単さ、速さなどがもてはやされ、「face to face」の人と人とのかかわりが減少している時代でもある。また、兄弟が少なく核家族で育つケースも増えるとともに、集団での外遊びも見かけることが少なくなった。人間関係の希薄化が進む中、身近なかかわりの中での適切なコミュニケーションのモデルとなる存在も減り、子どもたちにとっては、日常生活の中でコミュニケーションに必要な力を自然に獲得することが難しくなっている現状がある。

私は小学校に勤務しているが、ここ10年ほどの間に、人間関係づくりの面で様々な困難状況を抱えた子どもたちに数多く出会ってきた。いやなことがあるとすぐにカッとなり、友達に対して手が出てしまう低学年の子ども。自分の思い通りにならないと机を倒したり暴言を吐いたりして自分の気持ちが収まるまでに時間のかかる高学年の子ども。他者の目を必要以上に気にするあまり自分の気持ちを表現できずストレスをため込んでいる子ども。傷つきたくないという思いが先立ち、自分とは違う考えをもった集団とかかわろうとしない子ども、などである。

困難状況の特徴を大きくまとめると、他者より自分を尊重する行動をとる「他者理解が不足し、独りよがりで身勝手になりがちな子」と、自分より他者を尊重する行動をとる「自分の思いを表現できず、周りに合わせようとストレスをためる子」に区分されるのではないだろうか。

本当は「仲よくしたい。」「一緒に楽しく学習したい。」という気持ちをもっているのに、「他者の気持ちがわからない。」「自分の気持ちを正しく伝えることができない。」という実態のある子どもたち。表現方法が適切でないことに加え、他者や自分の気持ちを尊重できないために、人間関係はますます悪化し、よりよい関係作りが更に遠ざかってしまうという悪循環。その悪循環は「個」だけにとどま

### Ⅰ 研究テーマ設定の理由



【図1】人間関係形成上の困難状況

らず、学級という「集団」にも多大な影響を与えるということを私は実感してきた。

【図1】は、以上のような実態に、「子どもの社会的スキル横浜プログラム；子どもたちの気になる状況」を参考に加え、赤田が作成した「人間関係形成上の困難状況」の概念図である。

このような状況は、様々な調査機関等においても指摘されている。

「平成15年 埼玉県 公立小中学校教諭アンケート」でも、次のような子どもたちの特徴が示されている。

- ・ 些細なことで大きく傷つく
- ・ 感情のコントロールが未熟
- ・ うぬぼれが強く自己中心的
- ・ 対人関係のスキルが未熟

また、平成19年に出された「中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」でも、次のような実態が示されている。

いわゆる小1プロブレムや学級崩壊などに見られるような自制心や規範意識の希薄化、生活習慣の確立が不十分であることや問題行動等、いじめによる子どもの自殺、体力の低下など、子どもたちの心と体の状況にも課題は少なくない。

また、自分に自信がある子どもが国際的に見て少ない。学習や将来の生活に対して無気力であったり、不安を感じている子どもが増加するとともに、友達や仲間のことで悩む子どもが増えるなど、人間関係の形成が困難かつ不得手になっているとの指摘もある。

「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ 3. 子どもたちの現状と課題（子どもの心と体の状況）」P15より

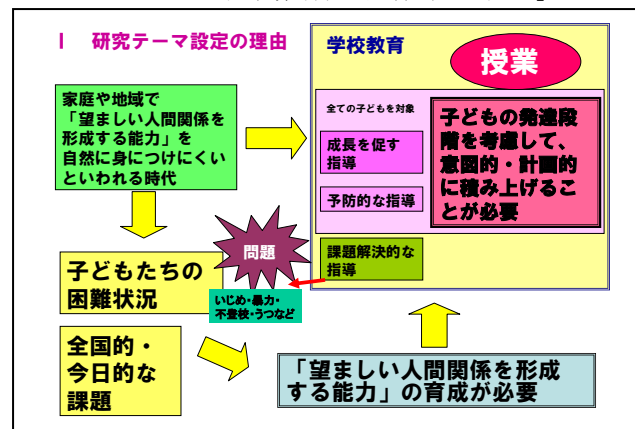
このような実態から、すでに様々な先行実践も行われている。私は、『「人間関係を形成する能力」の育成は、今日的な課題である』との認識をもち、今回の研究の方向性を決定した。

本主題設定の理由をまとめたものが【図2】である。

現代は「望ましい人間関係を形成する能力」を自然に身につけにくい時代である。ゆえに、子どもたちの困難状況は、今日的な課題となっており、「望ましい人間関係を形成する能力」の育成が必要となる。しかし、何の手立てもなければ「望ましい人間関係を形成する能力」は身に付きにくい。では、学校教育でできることは何か。

大きな問題が発生してからの解決・改善を目指した「課題解決的な指導」の他に、全ての子どもを対象とした、問題行動を防止する「予防的な指導」や子どもの能力の伸長を目指した「成長を促す指導」、つまり、「子どもの発達段階を考慮した、意図的・計画的な取り組みを授業として保障し、積み上げること」もこれから必要になるのではないかな。

以上のような考えのもと、本主題を設定した。



【図2】研究テーマ設定の理由

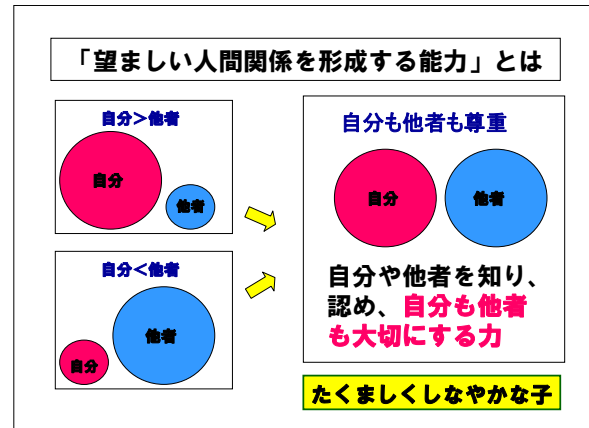
## （2）望ましい人間関係を形成する能力とは

「望ましい人間関係を形成する能力」とはどのような能力を指すのか、また、その中核となる力はどのようなものになるのであろうか。

今回その定義を、新学習指導要領「生きる力」の理念、幼稚園教育要領人間関係領域、小学校・中学校学習指導要領特別活動編・道徳編、OECD PISA型学力の基盤となる3つの

キー・コンピテンシー、WHO 10のライフスキル、「静岡市教育振興基本計画＜教育の基本理念＞」などを参考にすることで、「望ましい人間関係を形成する能力」とは、『自分や他者を知り、認め、自分も他者も大切にする力』とした。【図3】

この『自分や他者を知り、認め、自分も他者も大切にする力』とは、【図3】の左側に示したような自分と他者の大きさ（概念図として○の大きさを示している）のアンバランスさから、必要以上に攻撃的になったり、傷ついたりするといった状況を生み出すのではなく、右側のバランスのとれた自他の認識の中で、他者と上手に折り合える柔軟な心をもちながら生活できる力を意味している。これは、静岡市教育振興基本計画＜めざす子どもたちの姿＞にある「たくましくしなやかな子」に通ずるものであるとも考える。



【図3】望ましい人間関係を形成する能力とは

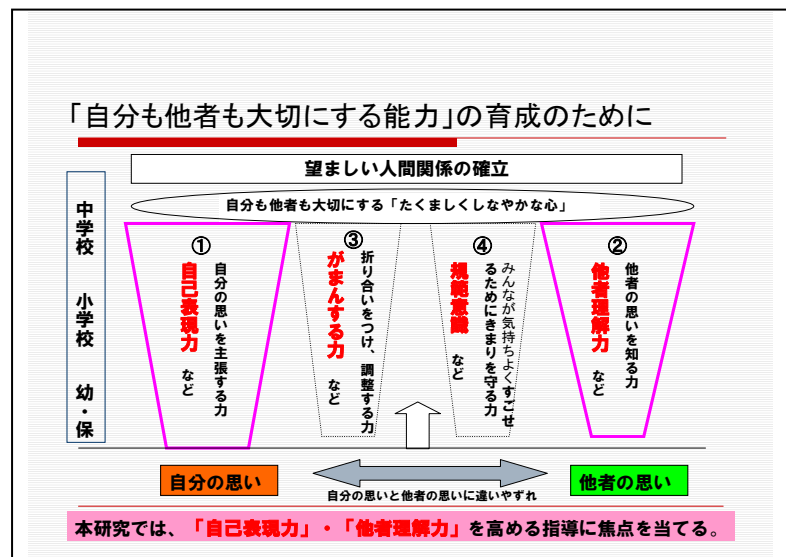
また、【図4】は、「千葉県教育委員会ニーズ調査」「横浜市教育委員会『子どもの社会的スキル横浜プログラム』」を参考に赤田が作成した「自分も他者も大切にできる力」を保育園・幼稚園時代から中学3年まで積み上げていくイメージ図である。

ここでは、「自分も他者も大切にするために必要となる力」を大きくわけて

- ① 自己表現力
- ② 他者理解力
- ③ がまんする力
- ④ 規範意識

の4つとした。このうち、①

「自己表現力」と②「他者理解力」がなければ、自分の思いと他者の思いに違いやずれがあることに気付きにくく、自分の気持ちを調整して他者と折り合いをつけたり、他者や集団と協調したりすることが難しいと考える。よって、本研究では、「望ましい人間関係を形成する能力」の必須条件でもあり、その中核と成り得るものとして、この「自己表現力」と「他者理解力」に焦点をあて、発達段階ごとの子どもの特徴や教師の具体的・効果的な指導方法を明らかにするとともに、「自己表現力」と「他者理解力」を育成するための授業実践のあり方について探求するものとした。加えて、発達段階を考慮した授業を行うことにより、子どもの「人間関係を形成する力」を積み上げる可能性についても探っていくこととした。



【図4】「望ましい人間関係を形成する能力」の育成において中核と成り得る「自己表現力」と「他者理解力」について

## 2 研究の目的

「望ましい人間関係を形成する能力」は、本来日常生活の中で自然に身に付けていくものである。しかし、主題設定の理由でも述べたように、現在の社会では、「望ましい人間関係を形成する能力」を自然に身に付けていくことは難しい傾向があり、人間関係づくりに苦しみ生きづらさを抱える子どももいる。これらの状況の改善には、「望ましい人間関係を形成するための能力」育成に向けて、子どもたちが自分に必要な知識やスキルを知ったり、その知識やスキルを日常生活の中で生かしたりする環境を学校の中に創出することがこれからますます必要になると考えた。「個」の力と「集団」の力、どちらも高めていくためには、ねらいを明確にし、学びを保障する「授業」という形態で学ぶことが有効であると考えられることから、発達段階に応じた「望ましい人間関係を形成する能力」を、授業を通して計画的・発展的に育成することの可能性を探っていきたい。

## 3 研究仮説

「自己表現力」と「他者理解力」を育成するための指導を、子どもの発達段階を考慮して行うことにより、「望ましい人間関係を形成する能力」を積み上げることができるのではないか。

## 4 研究方法概要

### (1) 基礎研究

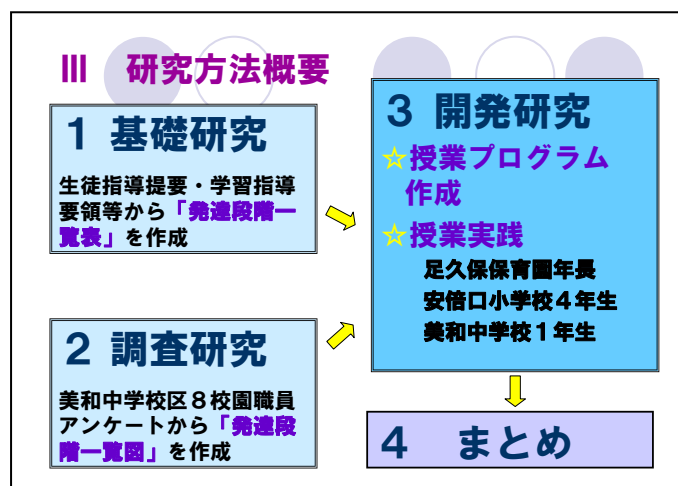
生徒指導提要、保育所保育指針、幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領から「望ましい人間関係を形成する能力」を育成するための「自己表現力」と「他者理解力」の発達段階別のあらわれを整理し、「発達段階一覧表」を作成する。

### (2) 調査研究

美和中学校区の保育園・幼稚園・小学校・中学校、計8校園114名の先生方に対し、アンケート方式による質問紙法で調査を行い、0歳から15歳まで担当する先生方の考えや指導を把握するとともに、「発達段階一覧図」を作成する。

### (3) 開発研究（授業プログラム作成・授業実践）

基礎研究・調査研究をもとに、子どもの発達段階の特徴とその指導の有効性が高まる時期を探り、「授業プログラム」を作成する。作成したプログラムの中で、「美和中学校区の子どもたちに特に求められている力」3種類に焦点を絞り、保育園年長・小学校4年生・中学校1年生の3段階で授業実践をする。【表1】



【図5】研究方法概要

【表1】実践授業プログラム

	第1時 コミュニケーションする 上で大切なことに気づき、 意欲を高める	第2時 自己理解・他者理解 (自分について知る・あら たに気付く) (他者の立場に立って気 持ちは想像する)	第3時 他者を尊重しつつ、自分の 思いを適切に表現する力 を高める (アサーション)
中1	「教室はどこだ？」 みんなで解決！	ポジティブ・ フィードバック	さわやかハキハキさん
小4	絵・ジェスチャーによる コミュニケーション ゲーム	こだまでしょうか	「わたしメッセージ」 マイナスの気持ちを 上手に伝えよう
保育園年長	にじいろのさかなと おおくじら	「気持ちの宝箱」 気持ちにぴったりの 言葉を探そう！	言ってみよう！ 両方の気持ち

#### (4) まとめ

3つの研究をふまえ成果と課題をまとめる。

## 5 研究の内容と結果

### (1) 基礎研究

下記アからクの文献・資料から、「自己表現力」と「他者理解力」に特に関係があると思われる文言を抜粋し、一覧表を作成した。【別資料 表2 参照】

主に「自己表現力」に関する文言は赤字、「他者理解力」に関する文言は青字であらわした。

- ア 生徒指導提要
- イ 小中学校学習指導要領 特別活動編
- ウ 小中学校学習指導要領 道徳編
- エ 小中学校学習指導要領 国語編
- オ 小中学校学習指導要領 外国語活動・外国語編
- カ 小中学校学習指導要領 体育・保健体育編
- キ 保育所保育指針
- ク 幼稚園教育要領

0歳から15歳までの「自己表現力」「他者理解力」に関する内容を整理する過程で、『中学生は「自己制御」が安定レベルに達する時期とあるが、問題行動の多くにはこの「自己制御力」の不足があるといわれている。この「自己制御力」を高めるためには「自己制御」を構成する「自己主張」と「自己抑制」という二つの側面を3歳から小学校低学年までに両者のバランスを考慮して育成を図ることが重要であること。』などのように、各発達段階で子どもたちにどのような特徴があり、どのような力が身に付きやすいのかを明らかにした。

## (2) 調査研究

### ア 調査概要

#### (ア) 目的

「望ましい人間関係を形成する能力」を育成するためには子どもたちの「自己表現力」と「他者理解力」を高める必要があるという前提に立ち、これらを構成する複数の項目に対し、同一中学校区の各保育園・幼稚園・小学校・中学校の先生方がどの力をどの程度必要と感じているか把握することを通して、子どもたちの発達段階に応じた指導のあり方と内容を探る。

#### (イ) 調査内容・方法

美和中学校区の保育園・幼稚園・小学校・中学校の先生方に、「自己表現力」を構成する内容として15項目【表3】、「他者理解力」を構成する内容として8項目【表4】についてアンケート方式による質問紙法で調査を行う。その際、①現在担当している子どもたちに育成が必要だと思う能力、②担当している前後の校種の子どもたちに育成が必要だと思う能力の2点に区分して答えてもらう。また、「自己表現力」と「他者理解力」を育成する具体的な取り組みについても自由記述式で回答を求める。アンケート調査結果から、0歳から15歳まで担当する先生方の考えや指導を把握するとともに、「発達段階一覧図」を作成する。

【表3】「自己表現力」15項目

自己理解	自分について、いろいろなこと(好きなこと、嫌いなこと、よいところなど)を知る力
自己肯定	自分のことを大切に思える力
感情認知①	自分のいろいろな感情に気付く力
感情認知②	自分の感情を分析する力
感情表現①	自分の感情を言語以外の方法(表情・身振りなど)で表現する力
感情表現②	自分の感情を適切な言葉で表現する力
話す①	自分の考えや気持ちを大人(家の人や先生など)にわかってもらえるように話す力
話す②	自分の考えや気持ちを友達にわかってもらえるように話す力
話す③	相手の考えや意見を受け止めて、自分の考えを協調的・建設的に伝える力
感情のコントロール	自分の感情をコントロールする力
頼む	困ったときに、周りの人に頼む力
断る①	自分がいやだと思うことをきちんと断る力
断る②	自分がいやだと思うことを相手の気持ちを尊重しつつ断る力
あいさつ①	自分からあいさつする力
あいさつ②	時と場に応じた気持ちのよいあいさつができる力



【表４】「他者理解力」８項目

他者理解	周りの人(家庭・先生・友達など)について、いろいろなこと(好きなこと、嫌いなこと、よいところなど)を知ろうとする力
他者認知①	自分と周りの人との違いに気付く力
他者認知②	自分と周りの人との違いを認める力
他者尊重	自分とは違う人の考え方や感じ方を大切にする力
聞く①	先生の話聞く力
聞く②	相手を意識して、反応をしながら話を聞く力
聞く③	相手の考えや気持ちを理解して話を聞く力
対人的洞察力	自分の言葉を相手がどのような気持ちで受け取るか推し量る力

(ウ) 調査時期  
平成２２年６月

(エ) 調査対象

校種	保育園	幼稚園	小学校	中学校	合計
回答者数	５６名	６名	３４名	１８名	１１４名

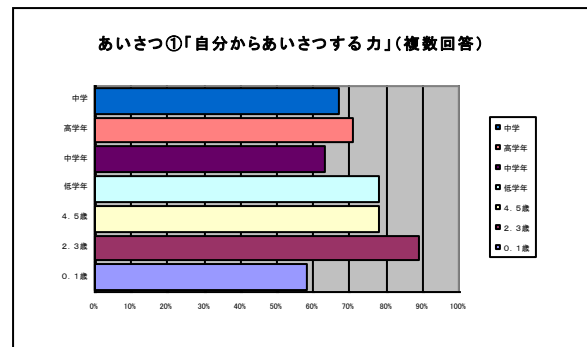
## イ アンケート調査結果

(ア) ほとんどの発達段階で重要視されている項目（自己表現力）

「自己表現力」の１５項目において、どの年齢でも育成が必要と感じられていた項目は、

- ・ あいさつ①「自分からあいさつする力」【図６】
- ・ 自己理解「自分についていろいろなことを知る力」
- ・ 自己肯定「自分のことを大切に思える力」
- ・ 頼む「困ったときに周りの人に頼む力」

の４項目であった。発達段階に応じて、必要となる力の内容と程度は異なってくると思われるが、これら４項目の力は、望ましい人間関係を形成していくために、年齢にかかわらず必要な能力と推察される。



【図６】 ほとんどの発達段階で重要視されている項目  
「自分からあいさつする力」

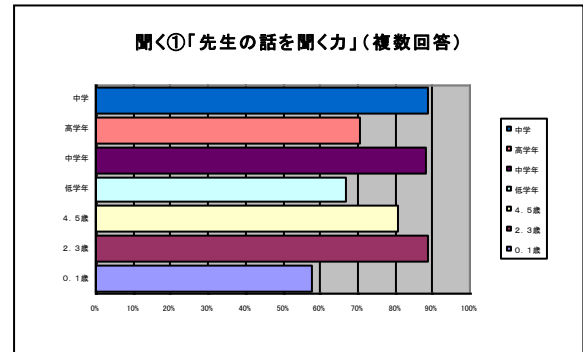
(イ) ほとんどの発達段階で重要視されている項目（他者理解力）

「他者理解力」の8項目において、どの年齢でも育成が必要と感じられていた項目は、

- ・ 聞く①「先生の話聞く力」【図7】
- ・ 他者理解「周りの人について、いろいろなこと知ろうとする力」
- ・ 他者認知①「自分と周りの人との違いに気付く力」

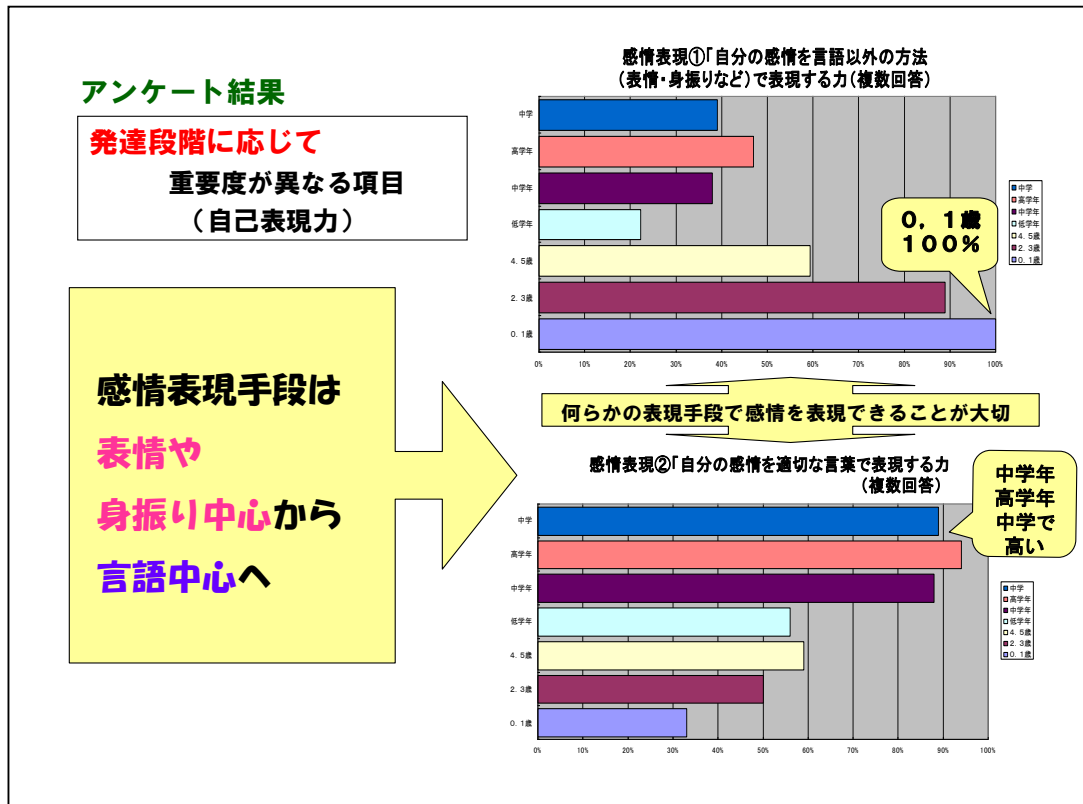
の3項目であった。

前述 (ア) で述べた「自己表現力」4項目と同様、年齢にかかわらず必要な能力と推察される。



【図7】 ほとんどの発達段階で重要視されている項目  
「先生の話聞く力」

(ウ) 発達段階に応じて重要度が異なる項目（自己表現力）



【図8】 発達段階に応じて重要度が異なる項目（自己表現力）～その1～



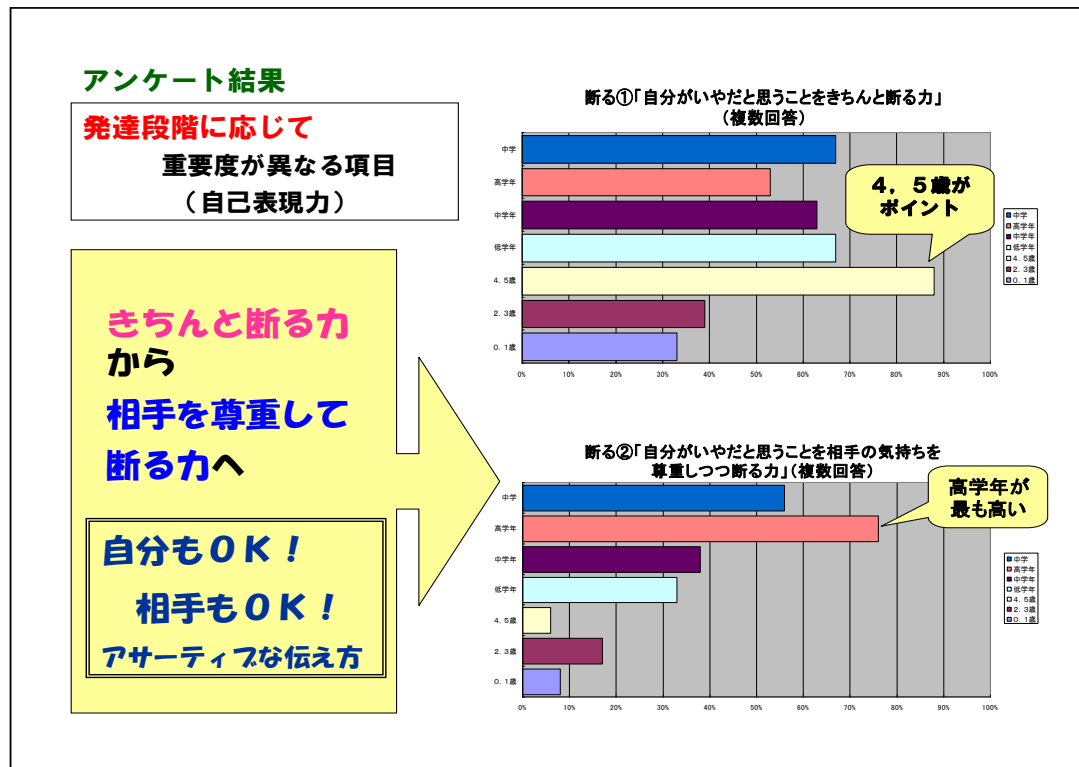
アンケート調査では、発達段階に応じて、その重要度が異なっていく項目も多く見つかった。「自己表現力」の中の一つの、感情表現①「自分の感情を言語以外の方法（表情・身振りなど）で表現する力」は、年齢が低いほど必要と考えられており、特に、0，1歳では100%の先生方が育成の必要性を感じていた。【図8；上部】

一方、感情表現②「自分の感情を適切な言葉で表現する力」は、年齢が上がるごとに必要と感じられている割合が増し、小学校高学年では88%、高学年94%、中学校89%であった。【図8；下部】

これらのデータより、年齢を追うごとに、子どもたちの感情表現手段が、表情・身振り中心から言語中心に移っていくことがうかがえる。

また、感情表現①と②を合わせ、「何らかの表現手段で感情を表現できる力」ととらえたならば、その力を各発達段階の多くの教師が必要だと感じており、この「感情表現力」は、多くの子どもたちに求められている重要な力の一つといえよう。

次に、断る①「いやだと思うことをきちんと断る力」では、4，5歳で88%、と、育成が必要と感じられる割合が急激に高くなっていた。【図9；上部】保育園・幼稚園の先生方からのアンケート調査「指導具体例」に記されていた例と同様に、自分のものを勝手に使おうとした友達に対し、たたくなどの方法で抗議するのではなく、「いやだ」という気持ちを言葉で伝えられる力も必要なのだということであろう。4，5歳の後、割合は減少するものの、育成が必要と答えている教師の割合は中学校までずっと50%を超えており、単純に「いやだ」と伝えて断る力は、年齢があがっても必要なのだと推察できる。



【図9】発達段階に応じて重要度が異なる項目（自己表現力）～その2～

一方、断る②「相手の気持ちを尊重しつつ断る力」は、小学校高学年で76%、中学校では56%と高くなっていた。【図9；下部】いじめや仲間はずれなどの友達関係のトラブ

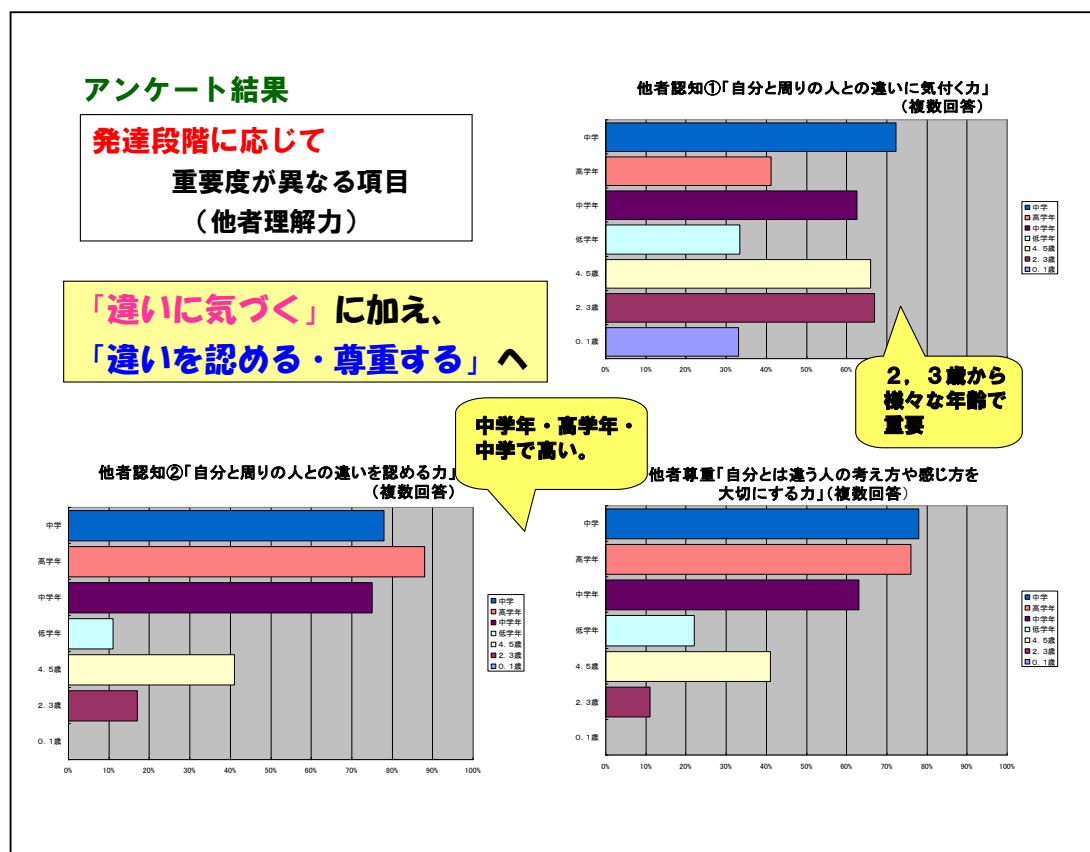
ルも深刻化しやすい年代である。時と場に応じ、他者を大切にしつつ、自分も大切にする断り方（自分もOK！相手もOK！のアサーティブな伝え方）は、小学校高学年・中学校の段階で特に必要となる力であるといえよう。これらのデータより、「きちんと断る力」から、「相手も尊重して断る力」に比重が移ってくることが読み取れた。

#### (エ) 発達段階に応じて重要度が異なる項目（他者理解力）

(ウ)と同じく、発達段階に応じて重要度が異なる項目として、「他者理解力」の中の一つの他者認知①「自分と周りの人との違いに気付く力」は、2，3歳では67％、4，5歳66％、と年齢が低い段階から高い割合を示し、小学校中学年63％、中学校72％と、様々な年齢で重要視されていた。【図10；上部】

一方、他者認知②「自分と周りの人との違いを認める力」と右下のグラフ、他者尊重「自分とは違う人の考え方や感じ方を大切にする力」は、いずれも、小学校中学年・高学年・中学校で必要と感じられる割合が高くなっていった。【図10；下部】

これらのデータより、「自分と他者の違いに気付く」ことに加え、「違いを認め、尊重する」という力が年齢を追うごとに必要になってくることがうかがえる。



【図10】発達段階に応じて重要度が異なる項目（他者理解力）

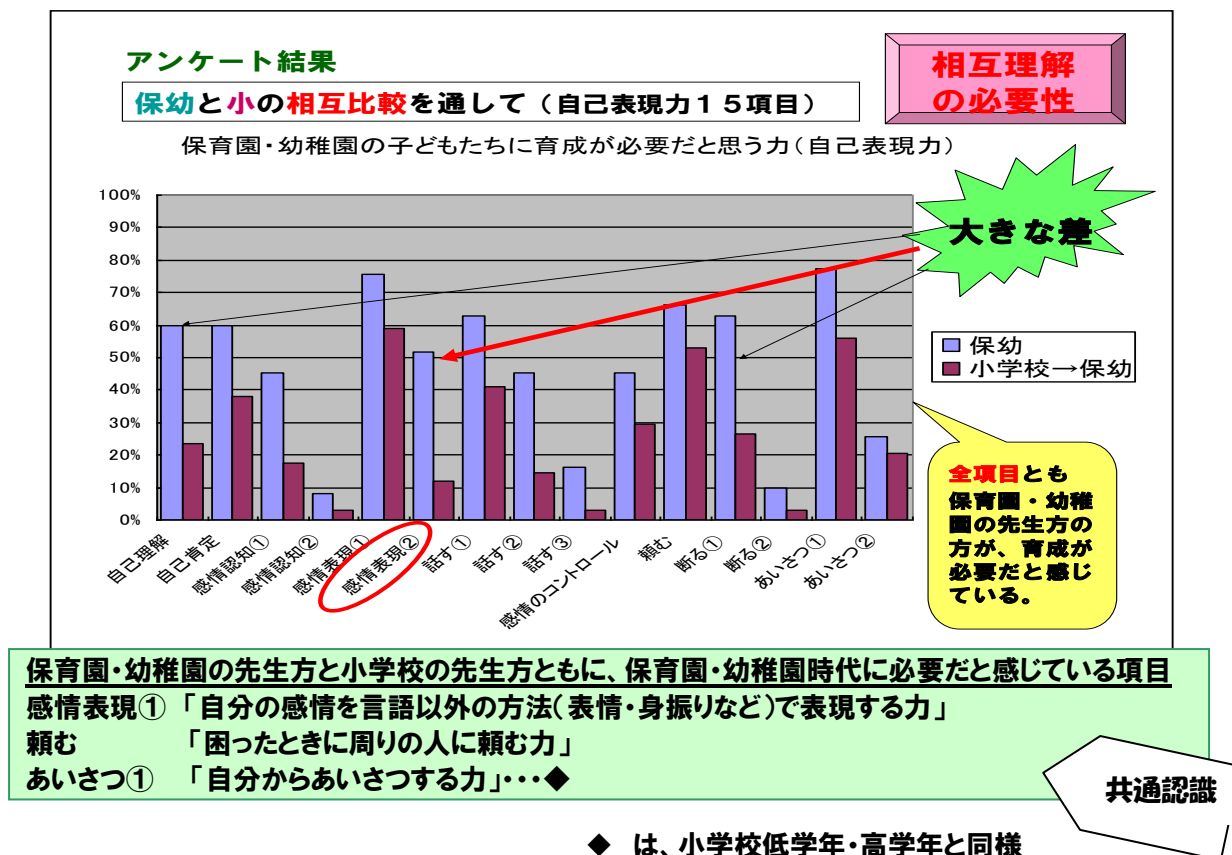
## (オ) 教師の思いの相互比較

今回のアンケート調査では、前述の通り、現在担当している校種の前後の校種の子どもたちに育成が必要だと思う能力についても回答を得た。

(保幼・小・中)の先生方の思いを相互比較したデータのうち、一つ例を挙げる。保育園・幼稚園の子どもたちに必要だと思う力(自己表現力15項目)について、保育園・幼稚園の先生方と小学校の先生方の思いを比較したものが【図11】である。全項目とも小学校の先生方より保育園・幼稚園の先生方の方が各力の育成が必要だと思っており、割合も高くなっていた。小学校の先生方が保育園・幼稚園段階ではまだ難しいのではないかと感えているのに対して、保育園・幼稚園の先生方は、目の前の子どもたちにこのくらいの力が必要だと感じ、指導をしているのであろう。

**感情表現②「自分の感情を適切な言葉で表現する力」**はもともと差が顕著で、保育園・幼稚園の先生方の52%が必要だと感じていたのに対し、小学校の先生方は12%にとどまっていた。感情を言葉で表現するトレーニングを保育園・幼稚園で行ってきており、それを小学校で引き継ぎ伸ばすという認識を小学校側がもつことも大切であるといえよう。一方、保育園・幼稚園と小学校の先生方が共通して必要と感じていた項目もあった。

(保幼・小)、(小・中)、どの段階でも上記と同様に、共通認識部分もあるものの、多くの項目で大きな意識の差がみられた。教師が子どもの姿と学びの実態を知りスムーズにバトンパスするために、同一中学校区の先生方が、子どもたちに願う力と各校園の取組を相互理解する必要がある。



【図11】教師の思いの相互比較(保幼・小)

(カ) 「自己表現力」「他者理解力」を育成する取組具体例

子どもたちの「自己表現力」と「他者理解力」を育成するために先生方が行っている実際の取組を、アンケート調査（自由記述）をもとに集計し、それを「教師の指導具体例集」としてまとめた。

「自己表現力」「他者理解力」とともに、子どもたちへの指導・支援が0，1歳から各年齢層にわたり、きめこまやかに行われている実態が明らかになった。「教師の指導具体例集」から主な取組をまとめたものが、【表5】【表6】である。

【表5】「自己表現力」を育成する取組具体例

0，1歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの気持ちを汲み取り、先生が言葉にして代弁する。</li> <li>・気持ちを何らかの方法で表せば、要求に応えてもらえる経験を積み重ねる。</li> <li>・子どもが自分の思いを主張できるよう、スキンシップを十分に取りながら信頼関係を築くために抱きしめる時間・じゃれ合い遊びの時間などを大切にする。</li> <li>・生活や遊びの場面において、子どもたちが自分の思いを言葉や身振りで表現したときは、言葉を繰り返して共感を現したり、思いをしっかり受け止めたりし、更に思いを表現する気持ちが高まるようにする。</li> </ul>
2，3歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「あなたはあなたでいいんだよ。」と認め、自己肯定感を育む。</li> <li>・「みんなの中の私」を意識的に育てていく。</li> <li>・時間がかかっても子どもが自分の言葉で自分の思いを伝えられるように待つ。</li> <li>・お茶を配るときには、一人ずつと「〇〇ちゃん、お茶どうぞ。」「ありがとう。」など保育者と子どもの間の言葉と心のやりとりを大切にする。</li> </ul>
4，5歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>・困ったときには具体的にどのような言葉で知らせるのか伝える。また、自分の言葉で伝えられたときには褒めることを繰り返す。</li> <li>・自分の思っていることを自由に表現してよい場を与え、自分の感情を出した方がよい場面もあることを学ばせる。</li> <li>・朝の会などの当番活動で、みんなの前で名前を言ったり自分の気持ちを発表したりする。</li> </ul>
小学校低学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝の会や帰りの会にスピーチを取り入れ、自分のことを相手に伝える力を養う。</li> <li>・授業では「私は・・・です。・・・と思います。」など、語尾までしっかり話す指導を繰り返す。</li> <li>・自分の思いを認識させ、これからの自分を見つめ、肯定し、元気に活動できるように道徳の時間に「心のノート」を活用する。</li> </ul>
小学校中学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝の会や帰りの会で、スピーチやニュース発表の場を設ける。</li> <li>・学級活動で一人一人が意見を言える場を設ける。</li> <li>・話すことが苦手な子どもには、前に出て指さしする、体で表現するなど、別の表現方法もすすめる。</li> </ul>
小学校高学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝の会のスピーチでは、自分の思いを話したり、発表者の意見に対して質問・感想・意見などを発表したりする場を用意する。</li> <li>・授業では、友達の考えに必ず反応するようにする。</li> <li>・自分の言葉で説明する場を多く設ける。</li> <li>・あいさつ運動を推進する。</li> </ul>
中学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分を紹介する活動を教科で取り入れる。</li> <li>・日記やふりかえりを学級通信で紹介する。</li> <li>・各行事等の折り、感想文を書く。</li> <li>・集団とかかわりながら同空間を共有させる中で自己を表現させる。</li> </ul>

【表6】「他者理解力」を育成する取組具体例

0, 1 歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>・玩具の取り合いなどトラブルの際、「パチパチ（叩く）すると、〇〇ちゃん、痛いよ。いい子いい子しようね。」「〇〇君もこのおもちゃ欲しいって。」など、相手の気持ちを保育士が言葉で代弁し、相手の思いも大事にする援助をする。</li> <li>・「〇〇ちゃん、いい子いい子だね。」など、相手の存在を理解させるために名前を呼んだり言葉かけを多くしたりする。</li> </ul>
2, 3 歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども同士のトラブルでは、必ずお互いの思いを聞き、受け止めた上で改善方法を知らせたり、お互いの思いを代弁したりする。そして、他の存在に気付かせる。</li> <li>・「お友達はこうしたらうれしかったと思うよ。」「これはいやだったと思うよ。」など、相手の気持ちを伝えていく場面を大切にする。</li> <li>・順番を守ることや「はい、どうぞ。」と言いながら、次の子に譲る方法を丁寧に指導する。</li> </ul>
4, 5 歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トラブルが生じたとき、自分の思いばかりぶつけるのではなく、相手の気持ちも汲み取れるように助言したり仲介したりする。</li> <li>・互いの思いを尊重しつつ、互いが納得できる方法を考える場を作る。</li> <li>・ルールのある遊びを取り入れ、トラブルがあったとき自分たちでどう解決するか考えさせていく。</li> <li>・異年齢の子どもたちがかわる場を意図的に用意する。</li> </ul>
小学校低学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・帰りの会で友達のよいところを話す。</li> <li>・発言者の方に体を向けて聞く指導をする。</li> <li>・トラブルがあったときには両者の気持ちを話させる。</li> <li>・道徳の授業で友達や地域の人への理解を深める内容を取り扱う。</li> </ul>
小学校中学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・帰りの会で友達の「いいところみつけ」を行う。</li> <li>・授業では、少人数のグループでお互いの話をしっかり聞く場・話し合う場を多く設ける。</li> <li>・トラブルがあったときには、自分が同じことをされた立場になって考えられるような声かけをする。</li> </ul>
小学校高学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・常に「人から学ぶ」ことを前提に指導する。学校のことだけでなく、ニュース内容などについても話題として取り上げ、その人や関係者の気持ちを想像させる。</li> <li>・授業の中で、自分の考えと友達の考えの違いに気付くような場を設定し、相手の考えの中に自分との共通点も見つけさせる。</li> <li>・道徳の授業では時々オープンエンドの形を取り、自分をふりかえったり、違う立場の意見にも納得できる部分を見つけたりさせる。</li> </ul>
中学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級通信で日記やコメントを紹介し、他の人がどのように考えているかを知る機会を多くする。</li> <li>・クラスづくりの段階で自己紹介やリレーションづくりゲームの場を取り入れる。</li> <li>・「聞くこと＝他を思いやること」と指導する。</li> <li>・他者を理解するためにまず、自分のことをよく理解できるようにする。</li> </ul>

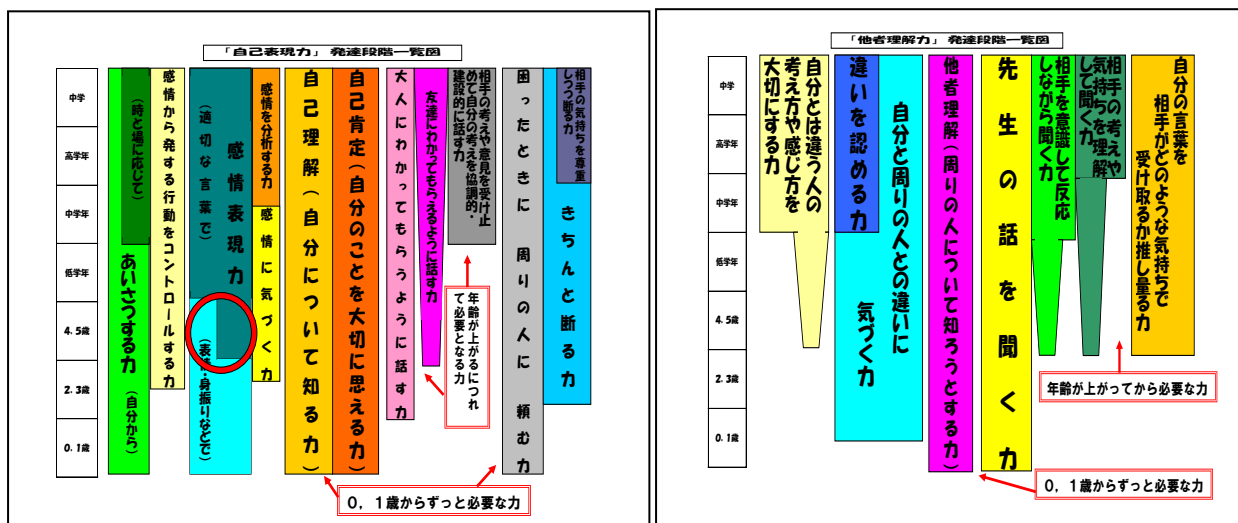
特徴的なことは、「自己表現力」「他者理解力」とともに、小・中学校では一斉指導の中で育成をねらう傾向が強いのに対し、保育園・幼稚園では、まさに「個」に合わせた指導・支援が毎日繰り返されていたことである。また、前述の「発達段階一覧表」にまとめたように、目の前の子どもの発達段階をとらえ、その段階で必要な指導を行っている例が多かった。

### (キ) 「自己表現力」「他者理解力」発達段階一覧図

以上のアンケート調査をふまえ、子どもたちに育成が必要だと先生方が感じている力を一覧図としてまとめた。【図12】【図13】

縦軸は年齢で、下が0、1歳、上が中学生を示している。「自己理解」「自己肯定」などは、力の程度や内容は変わるが0、1歳から中学3年までずっと育成が必要と考えられている力であり、一方、年齢が上がるにつれて育成が必要と考えられている力もある。「感情表現力」は、4、5歳が表現方法の混在期・転換期でもあり、「表情・身振りなどで表現する力」と「適切な言葉で表現する力」の両方の育成がこの時期に必要と考えられている。また、この一覧図から、「自己表現力」に比べ「他者理解力」の方が、全体的に年齢が上がってから育成が必要と感じられていることが読み取れた。

この「発達段階一覧図」は、授業プログラム作成の目安とした。



【図12】「自己表現力」発達段階一覧図

【図13】「他者理解力」発達段階一覧図

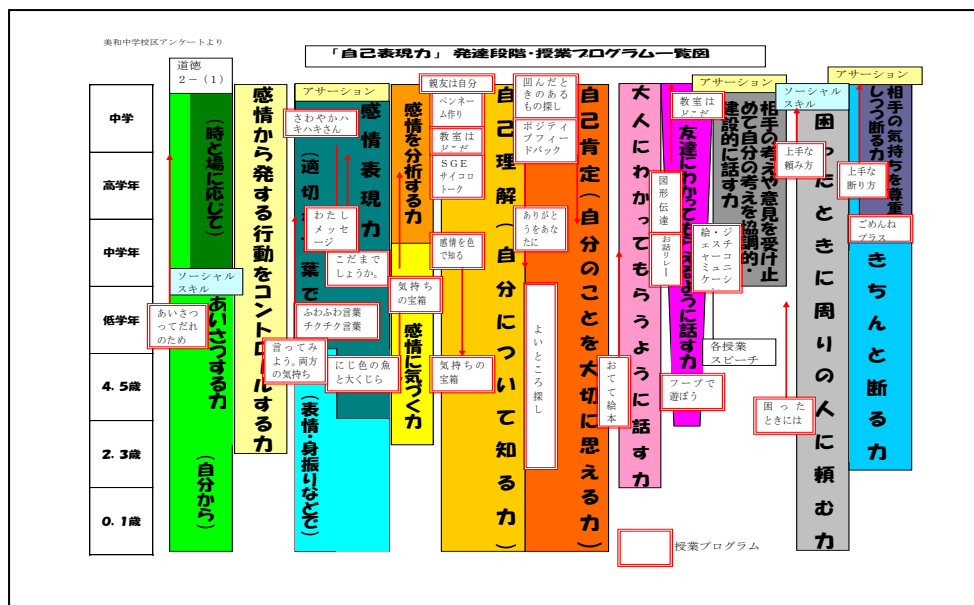
## (3) 開発研究

基礎研究・調査研究をもとに「自己表現力」と「他者理解力」の発達段階を考慮し、「授業プログラム」を作成し、授業実践を行った。

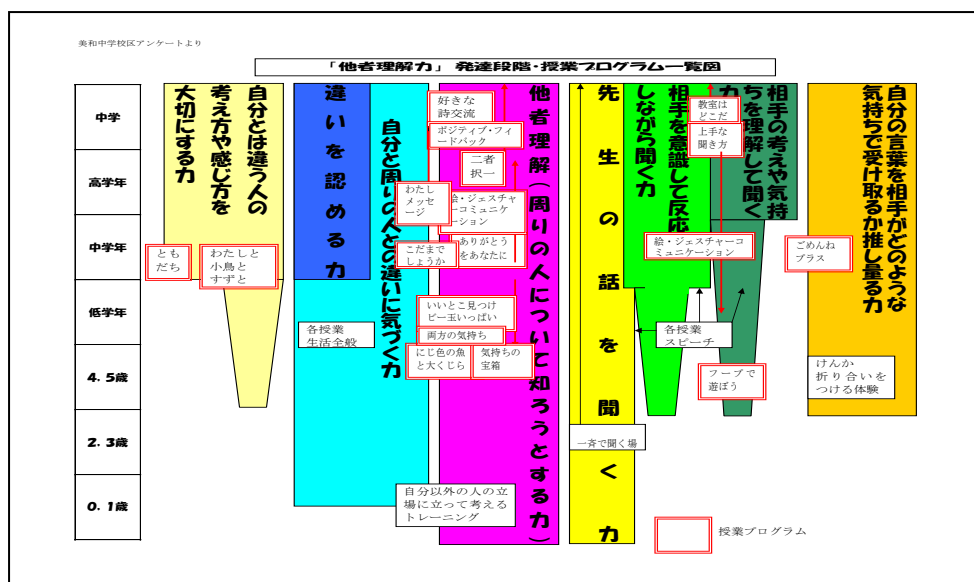
### ア 授業プログラム作成

各発達段階での子どもの特徴、適切な内容と手だてを考慮し、＜「望ましい人間関係形成能力」向上授業プログラム＞を作成した。その全体像は、「自己表現力」と「他者理解力」ごとに授業プログラム一覧図として示した。【図14】【図15】

一つのプログラムで複数の力の育成をねらいとしたものは主としてねらう力のところにプログラム名を記載した。「自己表現力」と「他者理解力」の両者にまたがるプログラムもある。子どもたちの実態に合わせて取り組めるよう、実施年齢には幅をもたせて作成した。



【図14】「自己表現力」授業プログラム一覧図



【図15】「他者理解力」授業プログラム一覧図

## イ 授業実践

作成したプログラムの中で、「美和中学校区の子どもたちに特に求められている力」の「3つの柱」に焦点を絞り、足久保育園年長クラス・安倍口小学校4年生・美和中学校1年生に対して3時間構成の授業実践を行った。【表7】は、実践授業の一覧表である。

1時間目は「コミュニケーションする上で、大切なことに気付き、コミュニケーションへの意欲を高める」ことを、2時間目は「自己理解・他者理解」を、3時間目は「他者を尊重しつつ、自分の思いを適切に表現する力を高める」ことを主なねらいとし、各発達段階に応じた手だてを講じながら授業実践を行った。以下には、保育園年長クラスの実践より順に示す。



【表 7】実践授業プログラム（保育園年長・小学校 4 年生・中学校 1 年生実践分）

ねらい	第 1 時	第 2 時	第 3 時
	コミュニケーションする 上で、大切なことに気付 き、意欲を高める	自己理解・他者理解 (自分について知る・あ らたに気づく) (他者の立場に立って気 持ちを想像する。)	他者を尊重しつつ、自分 の思いを適切に表現する 力を高める。 (アサーション)
美和中学校  1 年 2 組 担任 小林美香子先生	「教室はどこだ？」 みんなで解決！  グループで協力して解決 するエクササイズを経験 することにより、自分の 伝え方や受け取り方につ いて気付く。 コミュニケーションに は、伝え手が伝えようと 工夫することと、受け手 がわかろうとして受け取 ることが必要だというこ とに気付く。	ポジティブ・ フィードバック  自分の長所と短所を見つ め、自己理解を深めると ともに自己開示をする。 周りの人から見た自分の 長所を知る。 短所については、グルー プ内で短所を長所に変え て互いに返し合う活動 をし、他者理解とともに、 自己の肯定感を高める。	さわやかはきはきさん  4 つの感情表現パターン を知ること、自分の感 情表現のくせに目を向け る。 相手も自分も大切に した表現方法を知り、人 間関係を円滑にする表 現方法を自分なりに探 していこうという意欲 をもつ。
安倍口小学校  4 年 1 組 担任 橋本絵理先生	絵・ジェスチャーによる コミュニケーションゲーム  グループで協力して問 題を解くエクササイズ を経験することにより、 「伝えよう・わかろう」 とする姿勢の大切さに 気付く。	こだまでしょうか  普段、自分が友達に対 して話す言葉を見直し、 そのときの相手の気持 ちを想像する。 「こだまでしょうか」の 詩を取り上げ、人間関 係を円滑にするため には、自分の言動を適 切なものにしていく必 要性に気付く。	わたしメッセージ マイナスの気持ちを上手 に伝えよう  マイナスの気持ちが生 じた場面で、相手を非 難しないで自分の気持 ちを適切に伝えられ るように、「わたし」を 主語にした伝え方を 練習する。 今後「わたしメッセ ージ」を使おうとい う意欲をもつ。
足久保保育園  年長 うめ組 担任 浅野千明先生	にじいろのさかなと おおくじら  絵本を読み進めなが ら、時々立ち止まって 登場人物の気持ちを考 えることにより、自分 の気持ちを伝える大切 さや、やさしい言葉は 相手に伝わりやすい ということに気付く。	「気持ちの宝箱」 気持ちにぴったりの言 葉を探そう！  泣いたり怒ったりした ときに、その感情に ぴったりの言葉がある ことに気付くととも に、自分の感情を表 現するときぴった りの言葉を使おうと する意欲をもつ。	言ってみよう！ 両方の気持ち  けんかしたときの両 方の気持ちを言葉に してロールプレイす ることにより、自分 とは違う気持ちがあ ること、自分の気持 ちは言わなければ相 手に伝わらないこと に気付く。

## (ア) 保育園年長クラスの実践

対象園児：足久保保育園 年長クラス 16名

実施日：①平成22年11月11日(月) 9:30~10:00

② 〃 11月 8日(月) 9:30~10:00

③ 〃 11月 9日(火) 9:30~10:00

### ①1時間目；「にじいろのさかなとおおくじら」の実践

#### 発達段階

- ・ 自ら考えながら、自分の気持ちをわかりやすく表現したり、相手の気持ちを聞く力が育ったりする。
- ・ 自分なりに考えて判断したり、批判したりする力が生まれ、けんかを自分たちで解決しようとするなど、お互いに相手を許したり、異なる思いを認めたりすることができる。

○ 友達と遊び、衝突し、折り合いをつける体験が重要。

※保育所保育指針・生徒指導提要より赤田が箇条書きにまとめた。

**付けたい力** 感情表現力 ・ 他者理解力

#### 手だて

「にじいろのさかなとおおくじら」の話を場面ごと区切って聞かせ、そのときの魚たちや大きくじらの気持ちを考える。

#### ＜活動中の子どもたちの発言＞

- ・ くじらはね。友達に誘おうとしているんだよ。ちょっと、友達になって欲しいだけなんだよ。
- ・ くじらも なんにもしゃべんないからわかんないんだよ。
- ・ くじらは「友達になりたい。」って言えばよかったね。
- ・ 魚たちは食べられそうでこわいんだよ。
- ・ お魚たちはいやな気持ちだったんだよ。だって、プランクトン食べられちゃうから。
- ・ ぎざぎざが「ごめんなさい」って言えばいい。
- ・ にじうおはやさしい気持ちで話しにいったね。



#### 気付き

- ・ 自分の気持ちは言わないと伝わらない。
- ・ 伝えることって大事なな。
- ・ 伝えるときはやさしい「ふわふわにっこり言葉」がいいな。

#### 意欲

- ・ これから「ふわふわにっこり言葉」を使っていきたいよ。

場面ごとに立ち止まって、魚たちや大きくじらの気持ちを考えることにより、自分の気持ちは言わなければ相手に伝わらないことや伝えるときにはやさしい言い方がよいことに気付くことが

できた。また、「ふわふわにっこり言葉」をこれからたくさん使っていこうという言葉が子どもたちから多く聞かれた。この意欲を生かすため、活動後には後述5（3）－エ（イ）で述べる「ふわふわにっこり名人カード」を一人ずつ持たせ、意欲の継続と実生活での直接体験をねらった。

## ②2時間目：「気持ちの宝箱」～気持ちにぴったりの言葉を探そう～の実践

### 発達段階

- ・ 言葉によって共通のイメージをもつことができる。
- ・ 自ら考えながら、自分の気持ちをわかりやすく表現することができる。
- ・ 表情から他者の情緒を理解することができる。
- 友達と遊び、衝突し、折り合いをつける体験が重要。  
※保育所保育指針・生徒指導提要・人権教育第三次とりまとめより赤田が箇条書きにまとめた。

### 付けたい力

自己理解力 ・ 他者理解力 ・ 感情表現力

### 手だて

- ・ 表情カードの表情をまねする。
- ・ そのときの気持ちにぴったりの言葉を宝箱の中にためていく。

### 気付き

- ・ 気持ちにぴったりの言葉がたくさんあったよ。
- ・ 泣いたりすねたりするだけでなく、「一人じゃいやだよ。」とか「うれしくないよ。」って言葉で言えればいいんだな。

### 意欲

- ・ これからも「気持ちにぴったりの言葉」をたくさん使っていこう。  
(活動中の子どもたちの発言より)



表情カードを見せ、その表情を一つずつまねしていった。友達の表情を見たり、自分がその表情をするときの気持ちを想像したりすることにより、そのときの気持ちを表現するのにぴったりだと思われる言葉を次々と言うことができた。宝箱を用意したことにより、「気持ちにぴったりの言葉」をたくさん集めようという意欲も高まったと思われる。また、「心があったかく



【資料1】足久保保育園うめ組作成「気持ちの宝箱」

て笑ってる。ストーブみたい。」というすてきな言葉に対して「それ、いいね。」と反応し合い、あたたかいイメージを共有することもできた。

【資料1】は、年長クラス全員で見つけた「気持ちにぴったりの言葉」である。授業後にも部屋に掲示をしてもらい、意識の継続をねらった。

### ③3時間目；「言ってみよう！両方の気持ち」の実践

#### 発達段階

- ・ 自分なりに考えて判断したり、批判したりする力が生まれ、けんかを自分たちで解決しようとするなど、お互いに相手を許したり、異なる思いを認めたりすることができる。
- 友達と遊び、衝突し、折り合いをつける体験が重要。

※保育所保育指針・生徒指導提要より赤田が箇条書きにまとめた。

**付けたい力** 感情表現力 ・ 自己理解力 ・ 他者理解力

#### 手だて

両者の気持ちを言葉にしてロールプレイをする。

#### ＜活動中の子どもたちの発言＞

（場面）ゾウさんが並んでいたトイレの前の列に、ライオンさんが横入りしました。ゾウさんはライオンさんをドーンと押しました。ライオンさんはしりもちをついてしまいました。

＜ゾウさんの気持ち＞

- ・ ライオンさんが勝手に抜かしたから悪い。ゾウさんはいやな気持ちだった。だから、ドーンと押しちゃった。
- ・ ゾウさんは最初に並んでいたのに、ライオンさんが抜かしてきたから悲しい気持ちになった。

＜ライオンさんの気持ち＞

- ・ ライオンさんは、もれちゃうから、早く行きたかった。
- ・ ライオンさんはゾウさんに押されていやな気持ちになった。

#### 気付き

- ・ ゾウさんにもライオンさんにも、それぞれ違う気持ちがあるんだ。
- ・ ゾウさんは、ライオンさんをドーンと押さないで、「ぬかさないで。」ってやさしく言えばよかった。
- ・ 「とげとげチック言葉」じゃなくて「ふわふわにっこり言葉」を使えば心があたたかくなるよ。

（活動中の子どもたちの発言より）



子どもたちが興味をもちやすいゾウとライオンを登場させ、両者の気持ちをそれぞれ想像して言葉に表した。子どもたちが、ゾウ・ライオンそれぞれの絵を首からかけるとともに、

それぞれの足型の上に立って発言することにより、立場が明確になり、ゾウ、ライオンそれぞれになりきってそのときの気持ちを想像して言うことができた。一人ずつ、ゾウとライオンの気持ちを言ったことにより、両者にはそれぞれ違う気持ちがあること、また、自分の気持ちを伝えるときにはやさしい言葉で言った方が相手も受け入れやすいことに気付くことができた。

#### (イ) 小学校4年生の実践

対象児童：静岡市立安倍口小学校 4年1組 22名  
実施日：①平成22年11月17日（水） 5時間目  
② 〃 11月19日（金） 5時間目  
③ 〃 11月29日（月） 2時間目

#### ①1時間目；「絵・ジェスチャーによるコミュニケーションゲーム」の実践

##### 発達段階

- ・ 集団感情や集団意識が強く育ってきて、仲間意識が高まるが、学級全体としてのまとまりが育ちににくい。

- 異なる意見にも耳を傾け、公平に判断することが大切な時期。

※小学校学習指導要領 特別活動編より赤田が箇条書きにまとめた。

##### 付けたい力

他者理解力 ・ 自己理解力 ・ わかってもらえるように話す力

##### 手だて

- ・ 「絵・ジェスチャーによるコミュニケーションゲーム」というグループで協力して解決するエクササイズを行う。
- ・ キャッチボールの例を見せる。

##### 気付き

- ・ 絵やジェスチャーで物を表すのは簡単だけど、気持ちを表すのは難しい。やっぱり言葉の力は大きい。
- ・ 「伝え手」が伝える気でいてくれたから、「受け取り手」に伝わった。「受け取り手」がどんどん言葉を言ってくれたから早く正解した。
- ・ 「友達に伝えたい。」「しっかり受け取りたい。」という気持ちが大切。

##### 意欲

- ・ これからも一生懸命伝えようとしてたり受け取ろうとしてたりして、もっと仲よくなりたい。  
(ふりかえりワークシートより)

「伝え手」がグループの「受け取り手」にお題の内容を絵かジェスチャーを選択して伝えるエクササイズを取り入れた。「伝え手」も「受け取り手」も真剣になり、「なんとか伝えよう。」「なんとか受け取ろう。」としていた。その気持ちは、前のめりになって聞く姿勢や、「伝え手」を見つめる目からも感じられた。絵やジェスチャーとい





う、言葉より伝えることが難しい伝達手段を設定することにより、気持ちのように目に見えにくいものを伝えることと受け取ることの難しさに気付くことができた。また、よいコミュニケーションのイメージをキャッチボールの例で表現することにより、相手が受け取りやすいように伝えたりしっかり受け取ろうとしたりすることが大切だということに気付くことができた。



## ② 2時間目；「こだまでしょうか」の実践

### 発達段階

- ・ 自分の行動の善悪についてある程度反省しながら把握できる。
- ・ 感性や情操が発達する。
- ・ 自分の特徴に気付き、よいところを伸ばそうとする。

※小学校学習指導要領 道徳編 特別活動編より赤田が箇条書きにまとめた。

### 付けたい力

感情表現力 ・ 自己理解力 ・ 他者理解力

### 手だて

- ・ 普段、自分が友達に対して話す言葉を見直す場を用意する。
- ・ 「こだまでしょうか」の詩を読んだり、自作したりする。

### 気付き

- ・ いい言葉を使うと自分がうれしいことになるけど、悪い言葉を使うと悪いことが自分に返ってくる。
- ・ 人に言っているいい言葉と言ってはいけない言葉がある。
- ・ 「ばか」や「もう遊ばない」は友達を悲しくさせちゃう言葉。でも、最後に「ごめんね」と言えば誰でも仲直りはできる。

### 意欲

- ・ 友達の気持ちを考えて、言葉を言えるようにしたい。
- ・ 人の気持ちをもっとわかるようになりたい。
- ・ 言葉がこだまのようになることを知ったから、家でもやってみたい。
- ・ 悪い言葉を使うのをやめたくなってきた。

(ふりかえりワークシートより)

普段、友達に対してよく話す言葉を書き出す過程で、「あまりいい言葉を使っていないなあ。」などと、自分を素直に振り返る姿が見られた。

「こだまでしょうか」の詩を読んだときには、同じ言葉が返ってくことに気付き、「やさしい言葉を使うと相手もうれしくなるからやさしい言葉が返ってきて、相手がいやがる言葉を使うと相手もいやな気持ちになるからいやな言葉が返ってきてしまう。」と発言した児童の言葉に他の児童が共感し、同じ言葉が返ってくる理由まで感ずることができた。

【資料2】は、子どもたちが一人ずつ作詩したものを抜粋してつなげたものであり、授業後に新聞に載せ、全家庭に配布した。

「こだまでしょうか」	安倍口小四年一組
「おはよう」 っていうと 「おはよう」 っていうと	「いっしょに帰ろ」 っていうと 「いっしょに帰ろ」 っていうと
「寒いね」 っていうと 「寒いね」 っていうと	「サッカーやろう」 っていうと 「サッカーやろう」 っていうと
「元気」 っていうと 「元気」 っていうと	「ばか」 っていうと 「ばか」 っていうと
「アハハ」 っていうと 「アハハ」 っていうと	「お前とはもうしゃべらない」 っていうと 「お前とはもうしゃべらない」 っていうと
「楽しいね」 っていうと 「楽しいね」 っていうと	そうして、あとでさみしくなつて 次の日の休み時間に
「まってー」 っていうと 「まってー」 っていうと	「きのうはごめんね」 っていうと 「きのうはごめんね」 っていうと
「はあ」 っていうと 「はあ」 っていうと	「また何かして遊ぼう」 っていうと 「また何かして遊ぼう」 っていうと
「でもー」 っていうと 「でもー」 っていうと	「楽しいね」 っていうと 「楽しいね」 っていうと
「いっしょにブランコやろ」 っていうと 「いっしょにブランコやろ」 っていうと	「ありがとう」 っていうと 「ありがとう」 っていうと
「カードバトルしよ」 っていうと 「カードバトルしよ」 っていうと	こだまでしょうか、 だれ いいえ、誰でも。
「だいじょうぶ」 っていうと 「だいじょうぶ」 っていうと	
「すごい」 っていうと 「すごい」 っていうと	
「友達になろう」 っていうと 「友達になろう」 っていうと	
「仲よし」 っていうと 「仲よし」 っていうと	
「大すき」 っていうと 「大すき」 っていうと	

【資料2】「こだまでしょうか」 安倍口小4年1組作成

### ③3時間目；「わたしメッセージ」～マイナスの気持ちを上手に伝えよう～の実践

#### 発達段階

- ・ 自分の行為の善悪についてある程度反省しながら把握できる。
- ・ 集団への付和雷同的な行動が見られる。
- ・ 自分の特徴に気付き、よいところを伸ばそうとする。

※小学校学習指導要領 道徳編 特別活動編より赤田が箇条書きにまとめた。

**付けたい力** 感情表現力 ・ 他者理解力

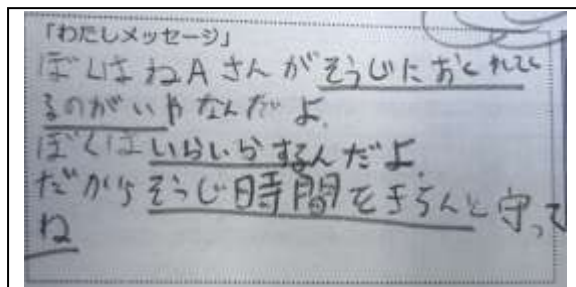
#### 手だて

- ・ 「あなたメッセージ」と「わたしメッセージ」という2種類の伝え方を比較する。
- ・ 「あなたメッセージ」を「わたしメッセージ」に変える文作りをする。

#### ＜授業の様子・・・「あなたメッセージ」を「わたしメッセージ」に変える文作り＞

##### 「あなたメッセージ」

Aさんは、そうじの時間に間に合ったことないじゃん。いつも遅れるのに平気な顔してさっ。どういうつもり？  
どうせ、そうじなんてする気ないんでしょ。





### 気付き

- ・ 本当に伝えたいことは、相手の悪口じゃなくて、自分の気持ちなんだ。
- ・ 言い方一つで相手の感じ方が違う。
- ・ 言われた人の気持ちを考えて言葉を言うことが大切だから、このことを忘れないようにしたい。

### 意欲

- ・ 怒った言い方をすると相手がいやな気持ちになるから、これからは少しやさしい言い方をするようにしたい。
- ・ ぼくは友達の悪いところを言っちゃってたから、これからは友達と話し合いたい。

(ふりかえりワークシートより)

相手を主語にして相手の悪いところを責める「あなたメッセージ」と、自分を主語にして自分の気持ちを伝える「わたしメッセージ」という二つの伝え方を比較することで、本当に伝えたいことは相手の悪口じゃなくて自分の気持ちだから、自分の気持ちを伝えるためには相手が受け入れやすい「わたしメッセージ」の方がよさそうだとすることに気付くことができた。更に、「わたしメッセージ」の文作りをすることで、今まで自分の気持ちを言葉に置き換えていなかったことに気付いたり、自分自身の気持ちを見つめることの難しさや大切さに気付いたりする子どももいた。また、マイナスの気持ちを伝えることをためらっていた子どもは、相手を傷つけない方法を使えばマイナスの気持ちを伝えてもよいのだという安心感を得ることができた。授業後のふりかえり感想文には、「怒った言い方をすると相手も自分もいやな気持ちになるから、これからは少しやさしい言い方をしたい。」など、これから自分が「マイナスの気持ち」を表現するときにはどのように表現しようかというイメージを伴った意欲があらわれた感想文が多く見られた。

### (ウ) 中学校1年生の実践

対象生徒：静岡市立美和中学校 1年2組 35名

実施日：①平成22年11月11日(木) 6時間目

② 〃 12月1日(水) 5時間目

③ 〃 12月13日(月) 5時間目

#### ①1時間目；「教室はどこだ？」みんなで解決！の実践

##### 発達段階

- ・ 相手や目的、状況に応じてわかりやすく話すことができる。
- ・ 話の内容を聞き取り、自分の考えに生かすことができる。
- ・ 自己の内面への関心が高まる。
- ・ 他人の思考過程も論理的に推測することができる。

※中学校学習指導要領 国語編・生徒指導提要より赤田が箇条書きにまとめた。

##### 付けたい力

話す力 ・ 聞く力 ・ 自己理解力 ・ 他者理解力

##### 手だて

「教室はどこだ？」というグループ全員の情報と協力が必要なエクササイズを行う。

### 気付き

- ・ 私は自分の気持ちを相手に伝えることがちょっと下手で不器用だな。
- ・ ぼくは、自分が言いたいときになかなか言えなくてタイミングを逃してしまった。
- ・ 適当に説明したり、適当に聴いたりしているだけでは、相手には伝わらないしコミュニケーションは成り立たない。
- ・ 一人一人のカードの内容をみんなに見せられないだけで、問題を解くのがすごく難しい。
- ・ 耳を傾けて話をしっかり聴くことは本当に大切。そうすれば理解しやすくなる。
- ・ 言わなければわかってもらえない。言えば一つのヒントになる。積極性は大切。
- ・ 自分の意見と他の人の意見を取り入れて話すことが大切。
- ・ わかってもらおうとして聴きやすいように話すこと、「聴こう！」と思って聴くことが大切。

### 意欲

- ・ 人の話は最後まで聴いてから自分の意見を言った。わからないときは聴き直してちゃんと理解できるようにした。
- ・ 人にわかりやすく話す力と、もっとわかろうとして聴く力の両方の力をもっともっと付けていきたい。
- ・ 今まででは声が小さくてなかなか思いを伝えることができなかったから、今度からよく伝わるようにはきはきと言いたい。

(ふりかえりワークシート・日記より)

このエクササイズの特徴は、自分のカード内容は自分しか見ることができないこと、全員のカードの内容がそろわないと回答を導き出すことができないことである。このことにより、グループ内で「自分の内容を話すこと」と「他者の内容を聴いて理解すること」の必然性が生じる。このエクササイズを体験する中で、全員が自分の伝え方や受け取り方についてふりかえったり、よりよいコミュニケーションのイメージをもったりすることができたということがふりかえりの感想から感じられた。中には、エクササイズのカード内容が見えないことと人の気持ちが見えないことを関連づけてとらえ、「自分の気持ちをわかってもらえるように努力して伝えることや他者の気持ちをわかろうと努力して受け取ることが大切だ」ということに気付いた生徒もいた。この「気付き」は、抽象的な思考力が高まる中学生の段階だからこそといえるのではないだろうか。

また、上記ふりかえりの中にもあるように、コミュニケーションは「一方通行」ではなく、「双方通行」であり、「伝える側」と「受け取る側」双方の力をこれから高めていきたいという意欲をもつこともできた授業となった。

## ②2時間目；「ポジティブ・フィードバック」の実践

### 発達段階

- ・ 内省的傾向が顕著になって自意識が一層強まる。
  - ・ 自己評価、有能感が低下していく。
  - ・ 自己の内面への関心が高まる。
  - 「閉じた個」ではなく、「開かれた個」として成長することが大切。
- ※ 人権教育第三次とりまとめ・生徒指導提要・中学校学習指導要領特別活動編より赤田が箇条書きにまとめた。

### 付けたい力

自己理解力 ・ 他者理解力 ・ 自己肯定感

### 手だて

- ・ ジョハリの窓の説明をする。
- ・ 「ポジティブ・フィードバック」の説明としてオセロの絵を用いる。
- ・ <長所シート>と<短所シート>を用意する。
- ・ 他者から「ポジティブ・フィードバック」してもらう場を用意する。

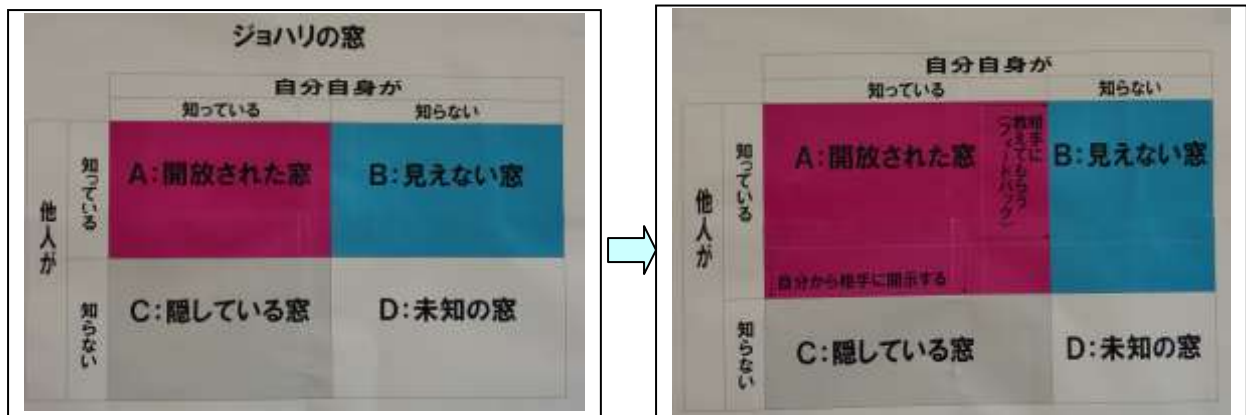
## 気付き・感想

- ・ 長所で、「これは自分には絶対ないだろう。」と思っていたところに○がついていて意外だった。私は外から見るとこんな人間なんだと知ることができた。
- ・ 長所は自分が思っているもの以外にもいろいろあることがわかった。正直びっくりした。
- ・ 自分には「気が弱い」「物事をはっきり伝えることができない」という短所があるけれど、見方を変えれば「やさしい」という長所を見付けることができた。
- ・ 自分が知っていて、相手が知らないことを素直に伝えてあげれば、もっと相手と仲良くなれそう。

## 意欲

- ・ 自分のいいところも、人のいいところも、もっとたくさん見つけていきたい。
- ・ 見方を変えるだけでこんなにも気持ちがうれしくなると知ってうれしかった。これから見方を変えて、友達のよさがわかるようになりたい。
- ・ ネガティブにばかり考えているので、「ポジティブ・フィードバック」をすることでこういう見方もあるんだなあと感じた。短所がいっぱいあるけれど、それも別の見方をしてポジティブに変えていきたいと思った。
- ・ これからは、他の人から見た自分の長所をどんどん伸ばしていきたい。

(ふりかえりワークシート・日記より)



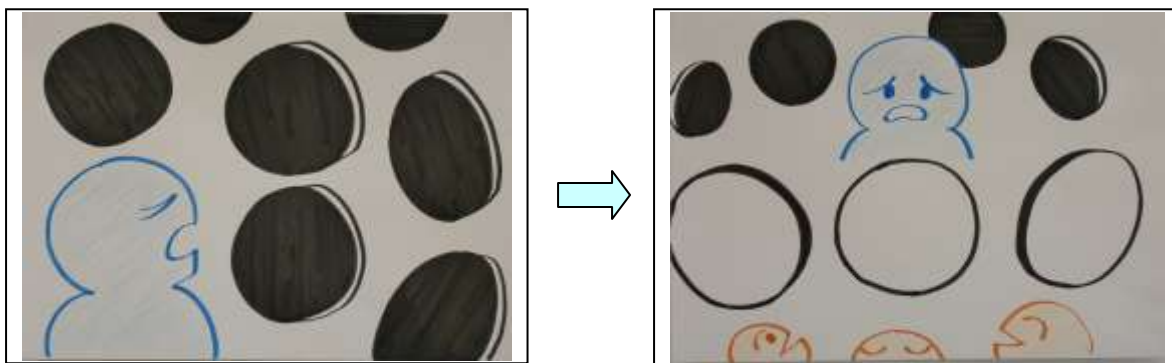
【資料3】「ジョハリの窓」説明図

【資料3】は、「ジョハリの窓」の説明図である。「A：開放された窓」が広いとよりよい人間関係がつくりやすくなることを知らせたことにより、「自己開示」と「フィードバック」によって「A：開放された窓」を広げようとする本時の活動への意欲の高まりが感じられた。

【資料4】は、「ポジティブ・フィードバック」のイメージをもちやすくするために用いた「オセロの絵」の絵である。短所を、見方を変え長所にしてフィードバックするイメージは、言葉の説明だけより絵があった方が理解しやすいと考えたため、「オセロの絵」を提示して説明した。生徒Aの日記には「オセロの絵がとてもわかりやすかったです。自分では黒に見える部分も他の人から見れば白に見えるかもしれないんだな。と思いました。これからこ



の意識をもっていきたいです。」と書かれていた。他の生徒も、思春期の自分たちは「だめだ」「できない」など自分に対して暗くネガティブに考えがちだが、反対側から見れば全く違うようにとらえることもできるというイメージをもつことができたようで、他者へのフィードバックを明るい表情で意欲的に行うことができた。



【資料4】オセロの絵 北原りゅうじ作「人間力の鍛え方」参考

**ポジティブ・フィードバック！自分を見つめよう！**  
1年2組 前

**自己開示**  
自分の長所を見つめよう

**<長所シート>**

① 自分の「よいところ」5つに○をつけましょう。(左の欄)

② グループの友達から見た自分の「よいところ」5つに○をつけてもらいましょう。(右の欄)

自分	長所 (よいところ)	あゆから	まんなから	まんなから	まんなから	まんなから
○	① 明るいい					
	② しっかりしている	○	○	○	○	○
	③ 元気がある					
	④ ユーモアがある					
	⑤ 努力家・がんばりや	○	○	○	○	○
○	⑥ 思いやりがある					
○	⑦ 行動力がある	○	○	○	○	
	⑧ おおらか			○		
	⑨ 自分の意見をはっきり言うことができる	○				○
	⑩ 聞きじょうず					
	⑪ 素直					
○	⑫ 進んで働く	○	○			○
○	⑬ 物ごとをよく考える					
	⑭ 想像力豊か					
	⑮ 友達と仲良くできる				○	○
	⑯ 一人でも好きなこと・正しいことができる					
	⑰ リーダーシップがある		○			
○	⑱ 協調性がある					
	⑲ 責任感がある					
	⑳ やさしい					○

**<短所シート>**

自己開示  
自分の短所を見つめよう

短所 (よくないところ)

短気・ちやあきる・めんどくさい・話の途中で止まる・おもしろい話を聞かれない・おもしろい話を聞かれない (おもしろい)

見方を変えると

短気 → 感受性が豊か  
おもしろい話を聞かれない → 自分の感情を表現にたれる。

**ポジティブ・フィードバック**

**<ふいかえり>**

自分の長所・短所を見つめたり、友達から「ポジティブ・フィードバック」をしてもらったりして、どんなことを感じたり気づいたりしましたか。

一番おもしろいことは、かんはりやの所に○を○をつけてもらったので、うれしかったです。短所をポジティブな長所に変えてもらうこともいいことだと思いました。そして、これから、いかにしていいかと思いました。

そして、○さんがうざりやういと言ってくれた時としてうれしかったです。自分や○さんのいいところを困っていたけど、小野さんに言われて、私は他人から見ての自分が自分を見ているのは、うざりやういではないと思いました。

【資料5】<長所シート><短所シート>

【資料5】は、生徒Bのワークシート(<長所シート>と<短所シート>)である。この生徒は、後述5 (3) ーウで触れる「授業前アンケート」自己評価で、自己肯定感の項目が5段階の1と、と最も低い値だった。しかし、今回の<長所シート>と<短所シート>を作っていく過程で、自分

のよさを他者から認めてもらったり、自分の短所を他者からよい見方で返してもらったりし、自分を肯定的にとらえる心の準備ができたように感じられた。「授業後アンケート」自己評価で自己肯定感の項目が4という値に上がっていたのは、この「ポジティブ・フィードバック」の影響が大きいのではないかと考える。

### ③3時間目；「さわやかハキハキさん」の実践

#### 発達段階

- ・ 自己の内面への関心が高まる。
- ・ 「自己制御」の発達が安定レベルに達する。
- ・ 他に対する自分の態度や行動が自己概念を形づくる。

※ 生徒指導提要・中学校学習指導要領 道徳編より赤田が箇条書きにまとめた。

**付けたい力** 感情表現力 ・ 自己理解力

#### 手だて

- ・ コントロールできないこと（自分に責任のないこと）とコントロールできること（自分に責任があること）を知る。
- ・ 「マイナスの感情」が生じたときの4つの感情表現パターンを例示する。
- ・ 自分の感情表現のくせに目を向ける場を用意する。

授業の冒頭で、コントロールできないこと（自分に責任のないこと）と、コントロールできること（自分に責任があること）を全員で考えた。「自分の感情はコントロールすべき」と、ほとんどの生徒が考えていたが、感情は生理現象だからいろんな感情がわいても仕方のないことを伝えたと安心した表情が生徒の間に広がった。しかし、感情表現を含む自分の行動には責任が生じることには納得の表情で、自分の感情表現方法はコントロールできるようになりたいという思いが授業後のふりかえりから感じられた。

感情表現方法を具体的に考えるために、「マイナスの感情」が生じたときの4つの感情表現パターンをワークシートと教師二人のロールプレイで例示した。

その後、自分の感情表現のくせに目を向ける場を用意した。

「友達にはドッカンしちゃうけど、親には言いたいことも言えないおそろなので 二つ合わせて（ドろろ）かな。」など、パターンが複合した「いろいろな自分」に気付く子も多かった。中学とは、「自己を見つめる力」が高まってくる段階であることが強く感じられた。

#### 気付き（自分の感情表現パターンについて）

- ・ 「おそろ」パターンが多いです。言いたいことがあっても言いにくくて「きられる」と思うともっと言えなくなってしまうことが多いです。家だと「ドッカン」が多いです。
- ・ 自分は少し「おそろ」が多くて、相手に気持ちをはっきり伝えることができないけど、相手が「おそろ」だとなぜか「ネッチー」になってしまいます。でも、相手が自分と気の合う人だと、たまに「さわやかハキハキ」になることがあります。
- ・ 「おそろ」です。相手に何か伝えたいことがあるのに何も言えない。伝えようとしても「さわやかハキハキ」にはなれない。伝えようとするとうしても「ドッカン」になってしまう。

（ワークシートより）

授業後の感想欄には、下記のような気付きと意欲を伴った感想が見られた。

#### **気付き・意欲**

- ・ 気持ちを伝えるときに相手に言う言葉を考えるのは意外と大変だなと思いました。相手も〇、自分も〇の言葉は、相手の気持ちも自分の気持ちもよくわかっている人じゃないと言えないと思います。けっこう難しいです。イライラしているときは、つい「ドッカン」になったり「ネッチー」になったりします。私の場合は、自分の気持ちを素直に出せていないのでがんばりたいです。
- ・ これから、「おろろ」ではなく、自分の言いたいことをはっきり伝えて、相手に気持ちがはっきり伝わるようにしたいです。でも、相手が「おろろ」で何かを伝えようとしているなら、「どうしたの？言いたいことがあるなら言ってみて。」と言い、相手が話しやすいようにしたいと思います。
- ・ いきなり「さわやかハキハキ」はきついと思うけど、少しずつ「ネッチー」や「ドッカン」「おろろ」な感じをなくしていきたいと思いました。陰で悪口を言ったりすることもあるので、やさしいような感じをもちつつ、笑顔で自分の思っていることをしっかり伝えたいなと思いました。
- ・ 友達を大切にすることも大事だけど、自分の気持ちを大切にすることが大事なんだと思いました。自分はいつも心の奥に気持ちを閉じこめるタイプです。自分はいつも傷ついてもいいんだとばかり考えていました。だけど、この授業で、自分のタイプに似ている「おろろ」があって一瞬ドキッとしました。怖かったんですね・・・ これからは、しっかり自分の気持ちも伝えつつ、相手の気持ちをもっと大切にしていきたいです。【※１】

(ふりかえりワークシートより)

上記【※１】の感想を書いた生徒Cは、私が小学校５，６年の時に担任した「他者尊重のかたまり」のような子どもである。後日の感想には、「授業では自分に足りないところや相手の気持ちを考えた具体的な方法を知ることができ、全ての授業が私にすごく役立ちました。自分の気持ちがなかなか言えなかったけど、今はなんとなくですけど、ちゃんと言えるようになったと思います。」とあった。感情表現方法はそんなに簡単に換えられるものではないが、「自分をもっと大切にしていいいんだ。」「自分の気持ちをもっと出していいんだ。」という思いをもってくれたことは、私にとっても大きな喜びとなるとともに、今回の手だての有効性を感じる要因となった。

#### **ウ 授業前後のアンケート比較**

小４と中１の子どもたちに対しては、授業の前後にアンケート調査も行った。質問項目は以下の１１項目である。【図１６】 平均３の５段階自己評価（５：そう思う ４：少し思う ３：どちらともいえない ２：あまり思わない １：全く思わない）の結果からも授業の有効性を探った。

あなたは、日常生活で、以下の項目の内容をどのくらい大切と考えて生活していますか。

- ① 自分のことを自分でさらに知ろうとすることは、大切なことである。
- ② 自分の長所や短所（よいところや悪いところ）をさらに知ろうとすることは、大切なことである。
- ③ 自分の気持ちを言葉で伝えようとすることは、大切なことである。
- ④ 友達など、周りの人の気持ちや考えについてさらに知ろうとすることは、大切なことである。
- ⑤ 相手の立場に立って考えようとすることは、大切なことである。
- ⑥ 自分の気持ちをわかってもらえるように相手に伝えることは、大切なことである。
- ⑦ 相手の気持ちをわかろうとして話を聞くことは、大切なことである。
- ⑧ 自分の言葉を相手がどのような気持ちで受け取るか考えて話すことは、大切なことである。
- ⑨ 相手を大事にしつつ、自分の言いたいことを相手に伝えようとすることは、大切なことである。
- ⑩ 自分のことを本当に好きだと思えることは、大切なことである。
- ⑪ 自分の長所や短所（よいところや悪いところ）も含め、ありのままの自分を認めることは、大切なことである。

【図16】授業前後アンケート項目

(ア) 小学校4年生アンケート結果（授業前後のアンケート結果比較）

①小4クラス全体

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	合計
授業前	4.32	4.5	4.41	4.77	4.5	4.14	4.55	4.23	4.5	4.46	4.36	4.43
授業後	4.36	4.64	4.64	4.41	4.59	4.68	4.86	4.59	4.64	4.27	4.5	4.56

授業前のアンケートではほとんどの児童が5段階の「4」か「5」という自己評価であった。授業後、一部数値が下がっているところもあるが、授業後のアンケート調査時に「最初はなんとなく付けちゃったけど、授業をしたら自分ができていないことに気付いたから、数字が下がっちゃったよ。」と述べた児童もいることから、授業を行うことにより、子どもたちが自分自身の意識や行動がまだ十分でなかったと気付いた結果とも受け取れる。

②小4児童D

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	合計
授業前	2	3	3	4	3	1	4	3	2	3	2	30
授業後	4	4	5	4	5	5	5	5	4	4	4	49

児童Dは、⑥「自分の気持ちをわかってもらえるように相手に伝えることは、大切なことである。」という項目が、授業前の「1」から授業後「5」に上がっている。

授業後のふりかえりでは、「ぼくの言いたいことをみんながわかってくれてとてもうれしかったです。仲よくない人とも仲よくなれそうで、授業をやってすごくよかったです。」こ



だまの言葉を初めて知ったから、家でもやってみたいと思います。お父さん・お母さんにも教えたいです。」などの言葉があった。

友達とけんかになったとき、今までは友達を非難するような振る舞いが多かったが、授業後は「ぼくが言った言葉が原因かもしれない。」など、自分をふりかえることができるようになったという担任の先生からのうれしい報告もあった。

#### (イ) 中学校1年生アンケート結果（授業前後のアンケート結果比較）

##### ①中1クラス全体

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	合計
授業前	3.47	3.68	4.06	4.06	4.06	3.88	3.85	3.47	3.32	2.79	3.62	3.66
授業後	4.52	4.64	4.73	4.64	4.61	4.55	4.76	4.58	4.49	3.94	4.24	4.52

⑩「自己肯定感」の項目が授業前は平均3を下回るなど、全体的に自己評価が低めであった。しかし、今回の3時間の実践を通し、自己肯定・自己理解・他者理解・対人的洞察力・適切な感情表現の項目が大幅に高まり、授業の効果が感じられた。

同時に、中学生は「自己を見つめる力」が高まるからこそ、授業中の「気付き」が意味深いものになり、実践意欲がより高まることも感じた。

##### ②中1生徒E

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	合計
授業前	1	1	2	4	2	1	5	3	2	1	1	23
授業後	4	4	4	4	4	4	5	5	4	5	4	47

生徒Eは、合計が23から47へ、⑩自己肯定の項目が1から5へと、授業後の自己評価がとても高くなっている。第2時「ポジティブ・フィードバック」のふりかえりには、「長所で、自分が〇したところに全部〇がついていると、自信をもていいんだなあと思えた。自分が違うと思っているところに〇をつけてくれたのは、自分を見てくれているんだなあと思えてうれしかった。短所は、（これは前向きにとらえられないだろう）と思っていたことも友達が見方を変えて返してくれた。迷惑かなと思っていたところもいい方面に書いてくれて少し感動した。」と書かれており、他者から自分の長所や短所をよい見方でフィードバックしてもらうことで、自信をもつことができたと考えられる。

#### エ 授業と日常生活をつなげる手だて

「望ましい人間関係を形成する能力」は、本来、日常生活の中で身に付くものであろう。授業での「気付き」と「意欲」を日常生活につなげながら実践力を高めるためには、学級集団の中で意識の「強化」・「共通化」を進めることと、家庭においても子どもの学びを理解し協力してもらうことが必要だと考え、今回の授業と日常生活をつなげる手だてを考えた。

#### (ア) 授業後の「輝き新聞」

授業の内容と授業中の子どもの気付きを知らせる新聞を授業後に子どもと保護者に向けて発行した。【資料6】

このことにより、授業の内容を担任の先生と保護者が話すきっかけになったり、「家でも私（母親）が言葉の投げかけ方に気を付けてみます。」などの感想を保護者が寄せてくれたりする

など、子どもたちの実践力を高める一つのきっかけとなった。



【資料6】授業後の「輝き新聞」小4（3時間目）

#### (イ) カード・掲示物

保育園年長クラスの実践第1時「にじいろのさかなとおおくじら」の活動後には、園児の気付きを日常生活につなげ、実体験として生かすことをねらいとし、一人ずつに「ふわふわにっこり名人カード」【資料7】を持たせた。担任の先生が日常生活での子どもの「ふわふわにっこり言葉」を「こういうのがふわふわにっこり言葉だね。」と認め、価値づけ、カードにシールを貼るとともに言葉を書き残してくださった。



【資料7】ふわふわにっこり名人カード

そんな中、友達と大げんかしてすねている園児Fに対し、周りの子どもが「F君が公園来てくれないとさびしいじゃん。」「つまんないよ。F君と一緒に遊びたいもん。」などとロ々にやさしい言葉をかけ、園児Fは「みんながうれしいことを言ってくれるから～」と号泣したというエピソードや、朝、元気がないように見えた別のクラスの先生を見た園児Gが、「なんだか先生、元気ないね。どうしたんだろう。そうだ。元気が出るお花をあげるよ。」と言って花の絵を描いてプレゼントしたというエピソードなどを聞くことができた。「ふわふわにっこり言葉」がどんな言葉なのか、子どもたちは実際の生活の中の自分や友達の言動から少しずつ知ることができた例である。

また、保育園年長クラス全員の発言から作成した「気持ちの宝箱」【資料1】や、小学校4年生の授業で使用した「わたしメッセージ」の掲示物、中学校1年生の授業で使用した「ポジティブ・フィードバック」の掲示物などを授業後しばらく教室に掲示してもらうことにより、意識の継続を図った。

#### (ウ) 教師の声かけ

保育園年長クラスでは、上記（イ）で記したように、園児の言葉を「ふわふわにっこり言葉」と認めて価値付ける担任の先生の声かけが、園児の「ふわふわにっこり言葉」を使おうという意欲を高めるとともに、実際場面での言葉の例を学ぶことにつながった。

小学校4年生では、担任の先生が意識して「わたしメッセージ」を使うことで、「あっ、先生、それ『わたしメッセージ』だね。」と児童が気付いたり、トラブルがあった後「わたしメッセージ」を使うように促されて、ふてくされずに行動したりする姿が見られたという話を伺った。また、自分の気持ちを伝えたいけれど聴いてもらえなかったという児童に対し、先生が「どのように伝えたのか。」と確認したとき、「わたしメッセージ」で伝えられていたので、担任の先生がそのことを褒めると、児童は怒っていたことは忘れ満足した様子になったという話も伺った。

中学1年生でも、担任の先生が授業でのキーワードを意図的に使うことにより、生徒の会話や日記にも「今のはドッカンだ。」「さわやかハキハキがいいよ。」などの表現が多くみられるようになり、授業をふりかえることのできるような言葉を教師が意図的に繰り返すことで、徐々に日常に浸透する実感があるとの担任の先生の感想を聞かせていただいた。

以上のことから、教師が授業を生かせる効果的な場面で意図的な声かけをすることにより、子どもたちは「授業での気付き」を直接場面で生かす方法を知り、実践力を少しずつ積み重ねることができるという可能性を感じた。

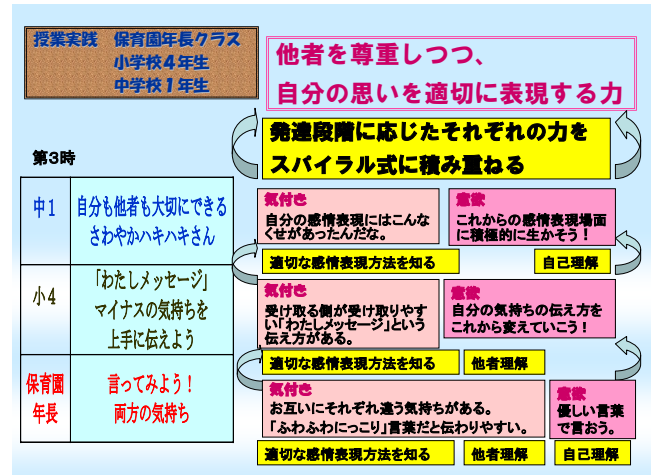
## 6 まとめ

### (1) 研究の成果

本研究は、子どもたちの「望ましい人間関係を形成する能力」の積み上げを目指し、学校教育でできることはないだろうか、との思いからスタートした。そして、全ての子どもを対象とし、子どもの発達段階を考慮した意図的・計画的な指導を授業として行うことで、「望ましい人間関係を形成する能力」積み上げの兆しが見られるのではないかと考え、基礎研究と調査研究を基に発達段階を考慮しながら授業プログラムを作成し授業実践を行った。その中で、下記の4点が成果として浮き彫りとなってきた。

- 1 他教科の学びと同様、「望ましい人間関係を形成する能力」、また、その中核と成り得る「自己表現力」と「他者理解力」にも発達段階による特徴がある。教科の学びと異なり、各段階の特徴や効果的な指導内容が教育現場に浸透していないが、各段階の特徴や効果的な指導内容を教師や子どもたちに接する大人が知っておくことは重要である。また、発達段階を保育園・幼稚園時代から義務教育修了時までの長期的視野からとらえることにより、その指導が必要な時期や生きる時期が今までより明確になり、教師が目の前の子どもたちに対し、より効果的な指導を行うことができる。よって、各段階に適した内容と手だてを考慮した「保幼・小・中の授業プログラム」作成は、今まで以上に「望ましい人間関係を形成する能力」を子どもたちに獲得させる可能性を高める。
- 2 発達段階を考慮し適切な手だてを講じた授業を行うと、各段階で子ども自身に有効な「気付き」が生じる。「授業プログラム」の内容は教師が提示したものであるが、その中で生まれる「気付き」は、子ども自身が獲得したものである。子どもにとっては「与えられた気付き」ではなく、「自ら獲得した気付き」という意識が強くなる。また、発達段階を考慮したため、子どもにとっては、「気付き」が今の自分にとって必要なものと感じられており、今日からでもその「気付き」を生かそうとする「実践意欲」が高まる。
- 3 本研究は1年間の実践であるため、同一の子どもたちの成長を追った研究ではないが、授業実践から、保育園年長・小学校4年生・中学校1年生と、3段階それぞれの「気付き」が感じられた。「他者を尊重しつつ、自分の思いを適切に表現する力

高める」ことをねらいとした第3時の授業実践においての各段階の「気付き」を簡単にまとめたものが【図17】である。「他者を尊重しつつ、自分の思いを適切に表現する方法」を自らの気付きとして、保育園年長・小学校4年生・中学校1年生と、各段階に合わせて繰り返し知り、その度実践意欲をもつことで、一度だけでは身に付きにくい「望ましい人間関係を形成する能力」も少しずつ積み上がるという手応えを、授業実践の子どもたちのあらわれから感じた。発達段階に合わせた「気付き」と「実践意欲」の繰り返しを生むことが、実践力を積み重ねる重要なポイントとなると思われる。

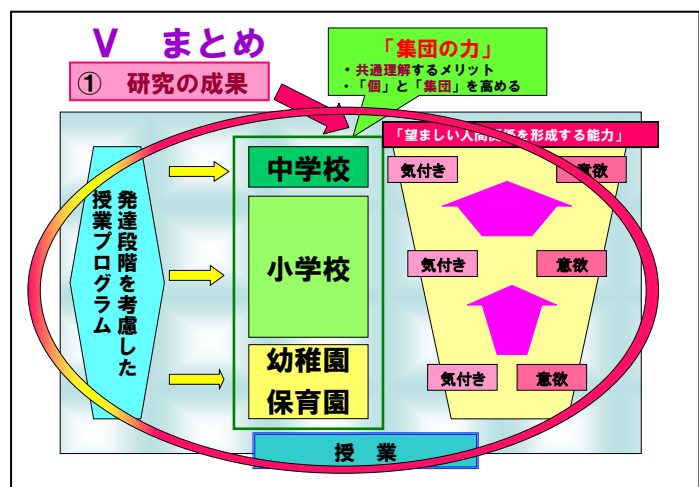


【図17】年長・小4・中1の第3時での「気付き」と「実践意欲」

- 4 「望ましい人間関係を形成する能力」を日常生活の中で身に付けていく場合、その経験はそれぞれ異なるので、自らの学びを他者と共有することは難しい。しかし、学級単位で授業を行うと、集団で共通理解することができる。そのため、「ちょっと言いにくいけど、『さわやかハキハキ』で伝えるとよいことを相手も知っているから勇気を出して伝えてみよう。」「相手は『さわやかハキハキ』の伝え方で努力しているな。しっかり受け取ろう。」など、相互に安心感や受容感が生まれ、成功体験が生み出されやすくなる。そのため、「個」と「集団」を同時に高めることができる。学級全体で行う授業の形式で「望ましい人間関係を形成する能力」の育成をねらうことは、「教科指導」と両輪となる「学級経営」の面からも、いじめ・暴力・学級崩壊などを未然に防ぎ、温かい人間関係の基盤づくりを目指す上で有効な手だての一つと成るだろう。

以上の4点から、『自己表現力』と『他者理解力』を育成するための指導を子どもの発達段階を考慮した『授業プログラム』という形で意図的・計画的に行うことは、子どもの『気付き』と『実践意欲』をもたせる上で有効である。」ということ、また、「継続的に取り組むことにより『望ましい人間関係を形成する能力』が積み上がる可能性が高まる。」ということが感じられた。

同時に、保育園・幼稚園・小学校・中学校の各校園の教師が、自分が担当する子どもたち以外の子どもたちの発達段階や効果



【図18】研究の成果



- ・ 大河原美以著「心が元気になる本②自分はダメだと思うとき」あかね書房
- ・ 伊東博著「ニュー・カウンセリング」誠信書房
- ・ 井澤信三ほか「ちゃんと人とつきあいたい」エンパワメント研究所
- ・ 辰巳渚著「子どもを伸ばす自立のための家庭のしつけ」岩崎書店
- ・ 岩立京子著「子どものしつけがわかる本」株式会社主婦の友社
- ・ マーカス・フィスター作 谷川俊太郎訳「にじいろのさかなとおおくじら」講談社
- ・ 本田恵子監修「表情カード・表情ポスター」クリエーション・アカデミー
- ・ 「こだまでしょうか」ACジャパン新聞広告
- ・ 安達昇ほか「人間関係を豊かにする授業実践プラン50」小学館
- ・ 渡辺弥生著「11歳の身の上相談」講談社
- ・ 國分康孝監修「エンカウンターで学級が変わる小学校編3」図書文化社
- ・ 國分康孝監修「エンカウンターで学級が変わる中学校編3」図書文化社
- ・ 平木典子著「子どものための自分のきもちが<言える>技術」PHP研究所
- ・ 平木典子著「図解自分のことをきちんと<伝える>技術」PHP研究所

#### <参考プログラム>

- ・ 横浜市「子どもの社会的スキル横浜プログラム」
- ・ 千葉県教育委員会「人間関係づくりのための実践プログラムいきいきちばっ子思いやりプラン」
- ・ さいたま市「HRTプログラム」、
- ・ 静岡県「人間関係づくりプログラム」
- ・ 大阪府松原市立松原第七中学校区 幼・小・中「人間関係学科」
- ・ 静岡市スクールカウンセラー谷澤久美子氏授業資料

#### <アンケート協力校園>

静岡市立安倍口保育園	静岡市立安倍口小学校
社会福祉法人美和南福祉会美和保育園	静岡市立美和小学校
社会福祉法人足久保福祉会足久保保育園	静岡市立足久保小学校
静岡市立安倍口幼稚園	静岡市立美和中学校

#### <授業実践協力者>

浅野 千明 足久保保育園  
橋本 絵理 静岡市立安倍口小学校  
小林美香子 静岡市立美和中学校